

# 初恋

トゥルゲーネフ



2022 年秋文学講読  
講座読了記念

## プロローグ

客人たちはずいぶん前に帰宅してしまっただ。時計が 0 時半を告げた。部屋の中には主人とセルゲイ・ニコラーエヴィチ、そしてウラジーミル・ペトローヴィチだけが残っていた。

主人は召使いをよび、夕食の残りを片付けるように命じた。

「・・・という訳で、これは既に決まったことなのですが」と主人は肘掛椅子に深く腰かけ、煙草を吸い始めてから言った。

「一人ずつ、自分の初恋の話をするごととしましょう。あなたからですよ、セルゲイ・ニコラーエヴィチ。」

セルゲイ・ニコラーエヴィチはブロンドの髪にぼつりとした顔で、小太りの男性であったが、まず主人を見てから、視線を天井の方に上げた。

「私には初恋はありませんよ」とやっこのことで彼は言った。「2 度目の恋から話を始めます。」

「どうしてですか？」

「とてもありふれた話ですよ。私は 18 歳でした、その時に初めて 1 人の大変可愛らしいお嬢さんに言い寄ったのです。ところが私は、まるで私にとってこんなことは珍しいことではないですよ、というような態度で彼女のご機嫌を取っていたのです。その後もこんな調子で他の女性たちにも接してきたのですがね。実のところ、6 歳の頃最初で最後に私が好きになったのは私の乳母なのです。でもこれは随分昔の話です。私たちの関係性についての詳しいところは記憶にありませんし、たとえ私が覚えていたとしても誰がこんな話に興味を持つでしょうか？」

「それは困りました」と、つづいて主人が

話し始めた。「私の初恋も、大して面白くないですからね。私の場合、妻のアンナ・イヴァーノヴナに出会うまでは、誰にも恋をしたことはありませんでした。しかも、妻とはとんとん拍子にことが進んだんです。父親らが私たちの見合いの引き合わせをすると、すぐにお互い惹かれあって、あつという間に結婚してしまいましたからね。私の初恋は簡単に話せてしまうんです。実を言いますとね、皆さん、私が初恋の話を持ち出したのは、お二人に期待してのことだったんです。お二人ともお年を召しているとまでは言えないですが、さりとてお若いわけでもない独身の方たちですからね。あなたなら何か面白いお話があるのではないですか、ウラジーミル・ペトローヴィチ。」

「確かに私の初恋は、ありふれたものとは言えないでしょうけれど」と、やや言い淀みながら答えたウラジーミル・ペトローヴィチは、40 歳前後の男で、黒髪にやや白髪が交じっていた。

「これはこれは！」主人とセルゲイ・ニコラーエヴィチは声をそろえて言った。「それなら尚更いいではないですか。話してください。」

「わかりました・・・いえ、そうですね。やはり話すのはやめておきます。私は口下手ですから、面白みのないあっけない話になるか、長々とした作り物めいた話になってしまうでしょう。ですが、もしよろしければ、思い出せたことを全てノートに書いてきますよ。そしてそれを読んでお聞かせする、というのはどうでしょう。」

二人ともはじめは承知しなかったのだが、それでもウラジーミル・ペトローヴィチは自身の提案を押し通したのだった。二週間後に再び三人で集まったとき、ウラジーミル・ペトローヴィチは約束を果たした。

次のようなことが、彼のノートには書かれていた。

## 1 章

私は当時 16 歳でした。1833 年の夏の出来事です。

私はモスクワに両親と住んでいました。両親はネスクスヌイ公園に面するカルーガ門の近くでダーチャを借りていました。私は大学に入るための準備をしていましたが、進学を急いでいなかったのです。ほど勉強していませんでした。

誰も私の自由を制限する人はいなかったのです。特に、私の最後のフランス人家庭教師を辞めさせて以来、私はしたいことをしていました。そのフランス人は、自分が「爆弾のように (comme une bombe)」ロシアに落ちたのだという考えをどうしても受け入れられず、一日中激しい表情をして寝床で転げまわっていたものです。父は無頓着ながらやさしく私に接していましたが、母は私以外に子どもがいなかったにも関わらず私にはほとんど関心を示しませんでした。他の心配事が彼女の頭を悩ませていたのです。私の父はまだ若くとても男前でしたが、母とは損得勘定で結婚したのです。彼女は父よりも 10 歳年上でした。私の母が送った人生は悲しいものでした。父の居ないところではいつも気をもんでいて、他人をねたみ、腹を立てていました。父をとてても恐れていたのです。一方、父は厳しく、冷淡でよそよそしい態度でした。私は、父以上に洒落ていて、落ち着いていて、自信に満ち、それでいて横暴な人を見たことはありません。

別荘で過ごした最初の数週間を、私は決して忘れることはないでしょう。素晴らしい天気が続いていました。私が市内から引越した 5 月 9 日は、ちょうど聖ニコライの日でした。散歩で別荘の庭やネスクスヌイ公園内を歩いて回り、カルーガ門の向こうまで足を伸ばすこともありました。その際、何でもよいので何か 1 冊、例えばカイダーノフの歴史の教科書などを持って行くのですが、本を開くことは滅多になく、それよりも、夥しいほどのたくさんの詩を覚えていたので、それらの詩を声に出して朗読していました。すると、体内で血が燃えたぎり、胸が疼いてきて、なんとも言えず甘ったるく、可笑しい気分になります。絶えず何かを待ち望んでいましたし、何かに怯えたり、あらゆることに驚きながらも、全てにおいて準備万端といった心持ちでした。空想にふけると、その空想がいつも同じ幻のまわりを、まるで明け方に鐘楼のまわりを飛びまわるツバメのように、勢いよく駆け巡るのです。物思いにふけったり、塞ぎ込んだりして、涙を流すことさえありましたが、メロディアスな詩や夕暮れの美しさに心が揺さぶられて流す涙や哀愁の向こうに、新たに沸き立つ生きることへの喜びが春の若葉のように萌え出るのでした。

私には乗馬用の馬が一頭いたので、自分で鞍を置き、ひとりで遠乗りへ出かけたものでした。馬をギャロップで走らせて、自分があたかもトーナメントに出場した中世の騎士にでもなったかのように想像してみたり（耳に吹きつける風の、なんと愉しいことでしょうか！）、あるいは空を見上げて、輝かしい陽の光や空の紺碧色を、胸をいっぱい広げて受け止めてみたり。

確か、その頃女性のイメージや女性の愛という幻想が私の頭に明確なイメージを伴って浮かんだことはほとんどありませんでした。しかし、私が考えること、私が感じることの全てに何か新しく、言い表せないほど甘美で、女性的で無意識のうちに私を恥ずかしくさせる予感が潜んでいました。これは、私という存在を侵した予感であり期待でした。私がそれを吸い込むと、それは私の血管を、そこに流れる血の一滴一滴の隅々までを流れたものです。それは間もなく狂ってしまう運命にあったのです。

私たちのダーチャは複数の円柱と 2 か所の低い離れをもつ田舎地主の家でした。その左側の離れにはごく小さな、安っぽい壁紙の工房がありました。私は幾度となくそこへ様子を見に行ったものですが、そこではもじゃもじゃ頭でやせこけ、汚れた上っ張りを着た 10 人の少年たちが、苦しそうな表情でひっきりなしに四角形のプレス切断機の木製レバーに飛び乗って圧をかけ、彼らの弱弱しい身体の重みで多種多様な壁紙の模様を作り出していたのです。右側の離れは空いていて、借り手募集中でした。

ある日のこと、5 月 9 日から三週間ほど経っていたでしょうか、離れの窓の鎧戸が開き、窓際に女性の顔が見えたので、どこかの一家が越してきたのだと思いました。覚えているのは、ちょうどその日の食事の席で、母が隣に越してきたのは何という方たちなのか執事に尋ねたのです。それが、ザセーキナという姓の公爵夫人だと知ると、母ははじめ、いくらか敬意のこもった声で「まあ！公爵夫人」と口にしましたが、その後こう言い足しました。「きっと、どこかの貧乏貴族ね。」

「三台の辻馬車でおいでになりました」

と、執事は恭しく料理を差出しながら言いました。「自家用の馬車はお持ちでない様ですし、家具もごくみすぼらしいものでございます。」

「そう」と母は答えました。「とは言え、まだましな方よ。」

父が冷ややかに母を見やっただので、母は口を閉ざしました。

実際、ザセーキナ公爵夫人は裕福であるはずがありませんでした。夫人の借りた離れは、かなり古びていて狭いうえに、天井も低かったのです。いくらか余裕がある人たちであれば、ここに住む気にならなかったはずですが、当時の私はこうした話を全て聞き流していました。公爵という肩書きが私に作用してくることは、ほとんどありませんでした。なにせ、少し前に、シラーの「群盗」を読み終えたところでしたから。

## 2 章

私は、毎日夕方になると、銃を持ってうちの庭を歩き回り、カラスが入ってこないように番をすることになっていました。この用心深くて貪欲な悪賢い鳥を、私はずっと前から憎らしく思っていました。今お話しているその日もまた、私は庭に出て行って、全ての並木道をいたずらに巡回した後（カラスの方は私だとわかって、ただ遠くから切れ切れにカアカアと鳴いていました）、ふと低い垣根の方へと近づいて行ったのです。まさにこの垣根が、うちの敷地と、右手の離れ側の領分である庭との境界線になっていました。その庭は離れの向こうまで広がる細長い帯状でした。私は俯きながら歩いていました。不意に人の声が聞こえてきたので、垣根越しに覗き込んだ私

は、石のように固まってしまいました。私の目の前に、奇妙な光景が出現したのです。

私のいるところから数歩しか離れていないところ、まだ熟していないエゾイチゴの茂みの間の空間に、背が高くすらっとした女性が、白いプラトークを頭に巻き、ストライプの入ったバラ色のワンピースを身にまとって立っていたのです。彼女の周りには 4 人の青年が群がって、彼女は代わるがわる彼らの額を小さな灰色の花で叩いているではありませんか。その花の名前を私は知りませんが、子どもには馴染のある花です。この花は小さな袋の形をしていて、それで硬いものをたたくと音を立ててはじけるのでした。青年たちはたいそう喜んで額を差し出していました。その一方でそのお嬢さんの仕草（私は横から見っていました）はどこか魅力的にも、高飛車にも見え、相手をかわいがっているような、馬鹿にしているような、それでいて可愛らしいものでした。そのため、私は驚きと喜びからあやうく叫びだすところで、すぐにでも額をあのかわいらしい指ではじいてもらう、そのためだけに世界中の全てを捧げてしまうような気持ちにもなるのでした。

銃が草の上に滑り落ちましたが、私は何もかも忘れて、そのすらりとした体つき、ほっそりした首、美しい両腕、白いスカーフの下でわずかに乱れた金髪、うっすら細めている知的な目元に、そのまつ毛、そしてその下の柔らかな頬を、食い入るように見つめていました。

「そこの君、ねえ、君」と、突然私のすぐそばで誰かの声がしました。「よその家のお嬢さんを、そんな風にじろじろ見ていいものですかね？」

私は全身がびくっと震え、気を失いそう

になりました。私のすぐ近くの垣根の向こうに、短く刈り込んだ黒髪の男が立っていて、皮肉めいた眼差しでじろじろ見ていたのです。ちょうどその瞬間に、女の人も私の方を振り返りました。表情豊かな生き生きとした顔に、大きなグレーの瞳が見えました。すると急に、その顔全体が小刻みに震えて笑いだすと、白い歯は輝き、眉毛は何やら面白い具合に釣り上がりました。私は真っ赤になって、地面からすばやく銃を拾い上げると、よく声を通るのですが、それでいて悪気の全くない高笑いに追われるように自分の部屋へ逃げ帰ると、ベッドに身を投げだして両手で顔を覆いました。

私の心臓が激しく脈打ちました。私の中には恥ずかしい気持ちと愉快的な気持ちが同居していました。そして今まで感じたことのない興奮を覚えました。休んだ後、私は髪と服を整えてお茶を飲み、下の階に行きました。若いお嬢さんの面影が目の前に浮かんでいる間、心臓の高鳴りは止まりましたが、なぜか心地の良い胸の痛みを感じていました。

「何かあったのか？」と不意に父が尋ねてきました。「カラスを仕留めたのか？」

出来ることなら全てを父に話してしまおうと思いましたが、私は思い留まり、少しだけニヤッと笑いました。寝る支度をしながら、私は、なぜそんなことをしたのかは自分でも分からないのですが、片足立ちで 3 回ほどくるくる回り、ポマードを髪につけ、それから一晩中死んだように眠りました。夜明け前に私は一瞬目覚めたかと思うと、頭を少しだけ起こし、狂喜に動かされたように自分の周りを見回し、それからまた眠りに落ちたのです。

第 3 章

どうしたらあの人たちと知り合いになれるだろう。翌朝目を覚ました私が真っ先に考えたのはこのことでした。お茶の前に庭へ出てみましたが、垣根の方へ近づきすぎないようにしていたからか、誰の姿も見かけませんでした。お茶の後に、別荘の前の通りを何度か行き来し、遠くから窓を覗き込んでいました。すると、カーテンの影に

あゝ人の顔が見えた気がして、私は驚いて足早に立ち去りました。「けれど、何とかして知り合いにならなくては」と、ネスクスニ公園の前に広がる砂原をあてもなく行き来しながら考えていました。「でも、どうやって？それが問題だ」。昨日出会ったときのことを本当に取るに足らない細かいところまで思い返しましたが、なぜだか、とりわけ鮮やかに思い浮かぶのは、私をからかったときのあの人々の姿でした。ところが、こうして気をもんで、あれこれ計画を立てている間に、運命はすでにお膳立てをしてくれていたのです。

私がない間に、母は新しい隣人から手紙を受け取っていました。その手紙は郵便局の書類か安っぽい酒の栓にしか用いられない褐色の封蝋で灰色の紙を封印したものでした。誤りの多い言葉となんとも締めりのない筆跡で書かれたこの手紙で、公爵夫人は私の母の庇護を求めたのです。公爵夫人の言葉を借りれば、私の母は、公爵夫人が非常に重要な裁判を抱えているが故に、彼女とその子供たちの運命を左右する重要人物と言える面々と親しいというのです。彼女はこう書いていました。

「私は貴婦人がくい婦人にご挨拶するよ

うにあなたぬご挨拶しているのです、こうしてごの機会を利用できれば嬉しゅうございます。」

手紙の最後で、夫人は、ご自宅へ伺いたいと母に申し出ていました。私が家に戻ると、母はご機嫌ななめでした。父が不在だったので、母は誰にも相談ができなかったのです。相手は「貴婦人」で、そのうえ公爵夫人なのだから、返事をしないわけにはいきませんし、そうかといってどう返してよいものか、母は困り果てていました。フランス語で書きつけるのはふさわしくないと考えたようでしたが、ロシア語の綴りについては母も不得手で、そのことを自分でもわかっているがゆえに、恥をかきたくなかったのです。

母は私の帰りをたいそう喜び、早速公爵夫人のところへ行き、「私の母はいつでもできる限りあなたを有力者に引き合わせる準備ができており、12時からおおよそ1時間のうちに訪問していただけないかと申ししております」と口頭で説明するようにと私に言いつけました。私が胸に秘めていた願いが予想外に早く叶ったことで、私は喜ぶやら驚くやらでした。しかし、私は自分に迫っている不安を表情に出さずに、外出前に真新しいネクタイとフロックコートを着るために自分の部屋に行きました。窮屈なものにも関わらず、私は家では折襟の短いジャケットまで着ていたのです。

#### 4 章

狭く、雑然とした離れの表玄関に私が思わず全身を震わせながら足を踏み入れる

と、そこで下男に出くわしました。彼は年老いて顔は黒みがかかった銅のような色をしており、目は豚のように小さく不機嫌そうで、額とこめかみに私が人生で見たことが無いほどの深いしわが刻まれていました。彼は皿の上に齧られたニシンの背骨を載せ、次の間へと続く扉を足で閉めながら私にぎこちなく言いました。

「何か御用でしょうか？」

「ザセーキナ公爵夫人は御在宅でしょうか？」と私は尋ねました。

「ヴォニファーチイ！」と扉から、よく響く女性の声が叫びました。

下男が黙って私に背を向けて振り返ると、ひどく使い古されたお仕着せの後ろ身ごろとそこについている同様に色あせて赤茶けた紋章付のボタンがあらわになりました。彼は皿を床の上に置いてから消えてしまいました。

「警察区へは行ってきたのかい？」と同じ女性の声が繰り返しました。下男は何かもごもごと言いました。「何だって？誰かが来たって？」とまた聞こえ始めました。

「お隣の息子さんが？ではお通ししなさい。」

「客間へお通りくださいませ」と下男は床から皿を拾いつつ私の前に再び現れて言いました。私は身なりを整えて「客間」と言われた部屋に入りました。

気づくと私は、狭くてとてもきれいとは言えない部屋の中において、部屋の家具はみずぼらしく、急ぎ適当に並べられたような代物でした。窓辺の、片肘が折れてしまっている肘掛け椅子に座っていたのは、50 歳くらいの、頭に何も被っていない不器量な女性で、着古した緑のドレスを着て、首にはげばげばしい梳毛のスカーフをしていました。女性の小さな黒い目は、私のことを

まじまじと見つめていました。

私は女性に近づいて行って、一礼しました。

「失礼ですが、ザセーキナ公爵夫人でいらっしゃいますか？」

「私がザセーキナ公爵夫人よ。それで、貴方が V さんのご子息なのね？」

「そうでございます。母の使いで参りました。」

「お掛けなさいな。ヴォニファーチイ！私の鍵はどこ？お前、見なかった？」

私はザセーキナ公爵夫人に、夫人の手紙に対する母の返事を伝えました。夫人は、太くて赤い指で窓枠をコツコツ叩きながら私の話を聞いていましたが、私が話し終わると、夫人はもう一度私をまじまじと見つめました。

「大変結構です。ぜひ伺いましょう。」

と、夫人はようやく口を開きました。「それにしても、まだお若いこと！おいくつですか、失礼ですけれど？」

「16 歳です。」と、思わず口ごもりながら私は答えました。

公爵夫人はポケットから何か書きつけた手垢で汚れた紙を取り出すと、自分の鼻の方へ持ち上げ、それを調べ始めました。

「いいお年頃ですこと」と夫人は椅子の上で身体をよじり向きを変えつつだしぬけに言いました。「そんなに固くならないでくださいな。私は飾らない人間ですよ。」

「飾らないにも程があるだろう」と私は無意識のうちに嫌悪感を抱き、夫人の品の無いなりを隅々まで見回しながら思いました。その時、客間のもう 1 つの扉がさっと開け放たれて、程なくして私が昨日庭で会ったお嬢さんが現れたのです。彼女が片腕

を上げると、その顔に薄笑いが見え隠れしました。

「こちらが私の娘です」公爵夫人は娘を肘で示しながら言いました。「ジーノチカ、私たちのお隣さん、V さんの息子さんですよ。お名前を教えてくださいませんか？」

「ウラジーミルです」私は興奮して立ち上がり少しかみながら答えました。

「父称は何とおっしゃるの？」

「ペトローヴィチです。」

「そうだった、私に警視監の知り合いがいたのだけれど、彼もウラジーミル・ペトローヴィチという名前だったわ。ヴォニファーチ、鍵は探さなくて結構、私のポケットに入っていたわ。」

お嬢さんは、かすかに目を細めながら、首を少しだけ横にかしげで、先ほどの薄笑いを浮かべながら私を見つめていました。

「私はもう、ムッシュ・ヴォルデマールにお目にかかったわ」と、お嬢さんは口を開きました。(鈴のように高くよく響きわたるその声は、どこか甘美な冷たさとなって、私の中を駆け抜けていきました。)  
「貴方のことを、そうお呼びしてもいいかしら。」

「どうぞ、そうなさってください。」と、私はしどろもどろになって答えました。

「お目にかかったって、どこで？」と、公爵夫人が尋ねました。

令嬢は、母親の質問に答えませんでした。

「貴方、今お忙しくて？」と、私から視線をそらさずに令嬢は言いました。

「いいえ、決してそのようなことはございません。」

「よろしければ、毛糸をほどこのを手伝ってくださいませんか？こちらへいらして、私の部屋へ。」

令嬢は私に軽くうなずいてみせ、客間から

出ていきました。私は彼女の後を追いました。

私の入った部屋にはいくらかましな家具があり、客間よりずっとセンスよく並べられていました。もっとも、このときの私は、ほとんど何にも気付くことができませんでした。まるで夢の中を動いているようでしたし、身体中の細胞という細胞で、どこか馬鹿馬鹿しいほどに張りつめた幸福感を感じていました。

公爵令嬢は腰かけると、赤い毛糸の束を取り出し、私に彼女の向かいの椅子を示してから熱心に束をほどき、私の腕に毛糸の束をかけました。この全ての動作を彼女は黙って、滑稽に思われるほどゆっくりした動きで、唇を少し開けて輝かしく茶目っ気のある薄笑いを浮かべながら行っただけです。令嬢は折り曲げたカードに毛糸を巻き付け始めてから、私が思わず目を伏せてしまうほどに明るくかつ素早く視線を私に浴びせかけたのでした。普段半分しか開いていなかった彼女の目が最大限に開いている間、彼女の表情は劇的に変化したのです。まさに顔中に光が満ちているようでした。

「ムッシュ・ヴォルデマール、昨日私のことをどうお思いになりました？」少し間をおいて彼女が尋ねました。「多分私のことを悪く思ったのでしょうかけれど」

「お嬢さま、私は、私はどうしてよいやら見当がつきません。。。」と私は戸惑いながら答えました。

「お聞きになって。」と彼女は言いました。「あなたは私のことをまだご存じないのですから。私ってとても不思議な人なのですのよ、いつも本当のことを言われていたいの。あなたは聞いたところ 16 歳だそうだけど、私は 21 歳ですよ。私はあなたよりずいぶん年上なのですから、あなたは



つも私に本当のことを話さなければいけませんわ。私の言うことも聞かないと駄目。」と彼女は付け加えました。「私を見てくださらない？ どうして見てくださらないの？」

私はますますあがってしまったのですが、彼女の方へ視線を上げました。令嬢はにっこりとしました。それは、先ほどのような薄笑いではなく、私を受け入れてくれたような微笑みでした。

「まっすぐ私を見るのよ」と、彼女は優しく声を落としながら言いました。「私、そうされても嫌ではないの・・・貴方のお顔、気に入ったわ。貴方とは、よいお友達になれそうな気がするの。貴方は私のこと、お気に召しまして？」と彼女は小悪魔的に付け足しました。

「お嬢様・・・」と、私は言いかけました。

「まずね、私のことはジナイーダさんと呼んでいただきたいの。それから、子どものくせに（と言ってから、彼女は言い直しました）、まだ若いのに、感じたままにまっすぐ言わないなんておかしいわ。大人ならそれでよいですけどね。ね、私のこと、お気に召しまして？」

彼女が私とここまであけすけに話してくれたことはとても嬉しかったのですが、少々腹が立ちました。私は、彼女に子ども扱いされたくないことを分かってもらいたくて、できるだけ構えずに、真剣な面持ちでこう言いました。「もちろん、貴方のことがとても好きです、ジナイーダさん。隠すつもりはありません。」

ジナイーダは、ゆっくりと間を置きながら首を振りました。

「家庭教師はいらっしゃるの？」と、いきなり尋ねられました。

「いいえ、だいぶ前から家庭教師はついていません。」

これは嘘なのです。例のフランス人と縁を切ってから、まだひと月も経っていませんでした。

「あら！あなたってもうすっかり大人になっていらしたのね。」

ジナイーダは私を指で軽く叩きました。「腕をまっすぐ伸ばしたままにしてくださいね」と言うと、彼女は熱心に毛糸玉を巻きつけ始めました。私は、ジナイーダが目線を上げないのを良いことに、最初はこっそりと、次第に大胆に彼女を観察し始めました。ジナイーダの表情は昨日よりもさらに素晴らしいものでした。ジナイーダの顔のパーツ全てが優雅で、知的で愛おしいものでした。ジナイーダは白いカーテンで覆われた窓に背中を向けて座っていたので、太陽の光がカーテンから漏れて、その柔らかな光で彼女のふさふさとした金髪、あどけない首元、なで肩、そしてしなやかでゆったりとした胸元を包み込んでいました。私がジナイーダを見つめていると、彼女がどれだけ愛おしくて近い存在に思えてきたことでしょうか！私には、ジナイーダのことをずいぶん前から知っていたようにも、全く知らなかったようにも、彼女に会うまでは自分が生きていなかったようにも思われるのでした。ジナイーダはエプロン付の既に着古した暗い色のワンピースを着ていました。それでも私はこのワンピースとエプロンのひだというひだ全てを喜んで愛でたい気持ちになるのでした。ジナイーダの編み上げ靴のつま先がワンピースの下から見えていました。私はこの編み上げ靴に崇拜の気持ちでひれ伏したいくらいでした。

「今私はジナイーダの前に座っているのだ」と私は思いました。「ジナイーダと知

り合うことができた、ああなんて幸せなんだろう！」私は感激のあまり危うく椅子から立ち上がるころでしたが、ただ美味しいものを与えられた子供のように足を少しぶらぶらさせるだけに抑えました。

私は水を得た魚のように上機嫌になり、いつまでもこの部屋から出たくない、この場所を離れたくないと思うくらいでした。

ジナイーダのまぶたがそっと上がり、再び私の目の前で彼女の明るい瞳が優しく輝きだしましたが、またもや彼女は薄笑いを浮かべました。

「そんなに私を見つめるなんて」とゆっくり言うと、ジナイーダは私に人差し指をたてて、いけないことよ、とたしなめました。

私は真っ赤になりました・・・この人は何でも分かるし、この人には全てが見えているんだ、という考えが頭をかすめました。この人に分からないことや、見えないものなどない！

不意に隣の部屋で何かぶつかる音がし、サーベルが鳴り始めました。

「ジーナ！」と客間で公爵夫人が呼んでいます。「ベロヴゾーロフさんがお前に子猫を連れてきたわよ。」

「子猫ですって！」ジナイーダは叫ぶと、勢いよく椅子から立ち上がり、毛糸玉を私の膝の上へ放ると、部屋から飛び出していきました。

私も立ち上がって、毛糸の束と毛糸玉を窓辺に置き、部屋を出て客間へ向かうと、呆気にとられて立ちつくしました。部屋の真ん中では、縞模様の子猫が小さな足を広げて寝っ転がっていて、ジナイーダは子猫の前に膝をつき、子猫の顔をそっと持ち上げていました。公爵夫人のそばには、窓と窓の間の壁をほぼ塞ぐようにして立ってい

る、金髪で縮れ毛の男の姿がありました。血色の良い顔をした、どんぐり眼の軽騎兵でした。

「ああ、何ておかしいんでしょう！」とジナイーダは何度も言いました。「この子の目は灰色ではなく緑色だし、耳は本当に大きいわ！ありがとう、ヴィクトル・エゴールイチ。大好き！」

私が昨日見た若者の一人と分かった軽騎兵は、微笑んでお辞儀をすると、さらに靴のかかとで音を立て、サーベルの吊り輪をガチャリといわせました。

「昨晚、耳が大きい縞模様の子猫がぜひとも欲しいとおっしゃいましたね。そこで私が手に入れてきたのでございます。あなたの命令は絶対ですから」というと彼はまた一礼しました。

子猫はか弱く鳴き、床のにおいをかぎ始めました。

「お腹がすいているんだわ！」ジナイーダは大声で叫びました。「ヴォニファーチイ！ソーニャ！ミルクを持ってきてちょうだい！」

色が抜けたプラトークを首に巻き、古びた黄色のワンピースを着た女中がミルクの入った小皿を持ってきて、子猫の前に置きました。子猫はぶるっと身震いすると目を細め、ぴちゃぴちゃと音を立てて飲み始めました。

「この子の舌は、本当に鮮やかなバラ色をしているわ！」ジナイーダは床につくほどに頭を低くし、横から自分の鼻よりも下に向かって子猫を眺めると、そのことに気づきました。

子猫は満腹になると、気取って手足をちょこちょこ動かしながら喉を鳴らしました。ジナイーダは立ち上がると、女中の方へ振り向き、冷淡にこう言ったのです。

「この子を向こうへ連れて行って。」

「子猫の褒美に、どうかお手を。」と、軽騎兵は歯をのぞかせてにっこりと笑い、真新しい軍服にぴったり包まれた屈強な身体をぐっと反らせました。

「両方よ」と、ジナイーダは言い返し、軽騎兵に両手を差し伸べました。ベロヴゾーロフが両手に口づけをしている間、ジナイーダはベロヴゾーロフの肩越しに私を見ていました。

私はじっとその場に立ち尽くし、どうすればよいのか分かりませんでした。笑い出せばよいのか、何か言えばよいのか、それともこうして黙っていればよいのか。すると突然、開けっ放しの玄関のドア越しに、我が家の下男であるフォードルの姿が目に見え飛び込んできたのです。フォードルは私に合図を送っています。私は何気なくそちらへ出ていきました。

「どうかしたの？」と、私は尋ねました。

「お母様が、お迎えにあがるようお仰せになりましたので。」とフォードルは囁きました。「貴方様がなかなかお返事を持ってお戻りにならないので、大層ご立腹でございます。」

「そんなに長いことここにいたかな？」

「1時間ちょっとになりますよ。」

「1時間ちょっとだって！」と私は思わず鸚鵡返しに言い、客間へ戻ると、両靴のかかたを打ちつけて、別れのお辞儀をしました。

「どちらへ？」と、軽騎兵の後ろから顔をのぞかせたジナイーダが聞いてきました。

「家に帰らなければなりません」公爵夫人に挨拶をしながら、私はこう付け加えました。「あなたは1時から2時の間に私共のところに行らっしゃると母に伝えます」

「その通りお伝えください」

公爵夫人は慌ただしく煙草入れを取り出すと、私が身震いさえするほどに音を立てて嗅ぎ煙草を吸いました。

「その通りお伝えください」と夫人は潤んだ眼で瞬きをし、うめき声をあげて繰り返しました。

私はもう一度お辞儀をすると、向きを変え、とても若い男なら自分が後ろから見られていると分かっているときに感じる一種の気まずさを背後に感じながら、部屋を出ました。

「よろしくて、ムッシュー・ヴォルデマール、また遊びにいらしてくださいね。」ジナイーダは声を張り上げると、また激しく笑い出しました。

なぜあの人はいつも笑うのだろう、と帰る道すがら私は考えました。一緒にいたフォードルは、一言も口をきかず、不服そうな態度で後ろから付いてきます。母は、あの公爵夫人のところでこれほど長い時間何をしていたのかと、私を叱り、驚き呆れました。私は何も答えずに、自分の部屋に戻りました。すると急に、とても悲しくなり、私は泣かないよう涙をこらえました・・・私には、あの軽騎兵が妬ましかったのです。

## 第 5 章

公爵夫人は、約束どおり母を訪ねてきたのですが、夫人に対し母は好感を持ちませんでした。二人が会っているときに私はその場にいなかったのですが、食事の席で母が父にこう話していたのです。あのザセーキナ公爵夫人という人は、ひどく低俗な女のようなだと。夫人が母に、セルギイ公爵に自分のことを取りなしてほしいと再三頼んでくるので、母がたいそううんざりしてし

まったこと。夫人の周囲では、常に何らかの訴訟や事件が起こっており、それも醜悪な金銭トラブルであること。その上、とんだ吹聴女に違いないとも。しかしそれでも母は、その夫人を娘さんと一緒に明日の食事に招いたと言い足したのです。（「娘さんと一緒に」という言葉を耳にし、私は皿の中に鼻を突っ込みそうになりました。）母としては、そうは言うものの、夫人はお隣さんであるし、名のある人でもあるから、ということなのです。この話に対し父は、その公爵夫人がどういう人だったか今になって思い出した、と母に告げました。父は若い頃、今は亡きザセーキン公爵を知っていたのです。受けた教育は素晴らしいのに、中身がからっぽで、言い争いを好む男であり、パリに長らく住んでいたため、仲間内では「パリっ子」と呼ばれていたそうです。彼は大金持ちでありながら、賭け事に負けて全財産を失ってしまったのです。

真の理由は分かりませんが、たぶん金銭に関わることだったのでしょうが、「公爵はもっと良い選択ができただろうに。」と父は付け加えて冷ややかに笑いました。

「どこかの下級官吏の娘と結婚して、結婚したと思ったら賭けに出て、完全に破産してしまったのだよ。」

「あの公爵夫人が、金を貸してと言ってきたらどうしようかしら」と母は言いました。

「十分あり得る話だろうな」と父は落ち着いて言いました。「彼女はフランス語を話すのか？」

「とても下手だったわ」

「そうか、まあいいだろう。確かお前は夫人の娘を招待したと言ったよな。誰かが請け負っていたんだが、彼女はとても魅力的で教養のあるお嬢さんだそうだ」

「そう！とすると、母親には似ていないということね」

「父親にも似ていないということだ。」と父は言いました。「父親にも教養はあったんだが間が抜けていな」

母はため息をついて考えこみました。父は黙りました。

私はこの会話の間じゅう、大変ばつが悪い思いをしました。夕食の後、私は庭へ出てみましたが、銃は持っていきませんでした。『ザセーキン家の庭』に近づくまいと心に誓っていたのに、私は抗いがたい力によって、そちらへ引き寄せられてしまいました。ですが、近づいた甲斐があったのです。垣根のそばに近づかないうちに、ジナイダの姿が目に入りました。今度は彼女一人でした。ジナイダは両手に小さな本を抱えて、小道をゆっくり歩いています。彼女は私に気がついていませんでした。

ジナイダがもう少しで通り過ぎてしまいそうなところで、私ははっと我に返り、咳払いをしました。彼女は振り向きましたが、立ち止まることなく、丸い麦わら帽子についている幅の広い水色のリボンを手でさっと除けて私の方を見、静かに微笑むと、再び本へ視線を落としました。私は帽子を脱ぐと、しばらくその場に立ち尽くしていましたが、沈んだ気持ちで立ち去りました。彼女にとって僕って何なのだろう、と（どういうわけか）フランス語で考えました。

聞き覚えのある足音が私に向かってくるのが聞こえました。私が振り向くと、父が私の方に早く軽やかな足取りで歩いてきていたのです。

「あの方が公爵令嬢かね？」と彼は私に尋ねました。

「公爵令嬢です」

「お前は本当に彼女を知っているのか？」

「私は今朝公爵夫人のお宅で彼女にお会いしたのです」

父は立ち止まると、おもむろに踵を返し、戻っていきました。ジナイーダの横に並ぶと、父は彼女に丁寧にお辞儀をしました。彼女も、少しばかりの驚きを表情に残しつつ父にお辞儀をし、本を下ろしました。私は彼女が父を目線で見送っているのを見ました。私の父はいつもとても優美で、独創的ながらもシンプルにまとまった服に身を包んでいましたが、父の姿がこれほどまでに格好よく見えたことも、その灰色の帽子がわずかに薄くなった巻き毛の上にこれほど美しく鎮座しているように見えたこともありませんでした。私はジナイーダのところへ行きかけましたが、彼女は私を見もせず、また本を持ち上げると去ってしまいました。

## 第 6 章

その日は一晩中、そして翌朝もずっと、私は鬱々とした気持ちのままで過ごしました。覚えているのは、勉強をしようとカイダーノフの教科書を手にとったのですが、眼前には、あの有名な教科書の広くとられた行間やページがちらつくだけで無駄に終わりました。10回立て続けに、『ジュリアス・シーザーは武勇に優れていた』という一節を読んでも、何一つ理解できず本を投げ出してしまいました。食事の前に、私はもう一度ポマードをたくさんつけて、フロックコートを着込み、ネクタイをつけました。

「何だってそんな格好をするの？」と母が尋ねました。「まだ学生にもなっていないんだし、試験に合格するかも分からないじ

ゃないの。上着を縫い直したばかりじゃないの？忘れずに着なさいよ！」

「お客様がいらっしゃるのよ」と私は半分やけになりながらささやき声で訴えました。

「ばかばかしい！どんなお客様が来るっていうの！」

これは、屈服するしかありませんでした。私はフロックコートから上着に着替えましたが、ネクタイは外しませんでした。公爵夫人が娘を連れてやってきたのは、食事の30分前でした。老夫人は、既に私にはお馴染みの、緑色のドレスに黄色のショールを引っ掛け、真っ赤なりボンの付いた流行遅れの帽子を被っていました。公爵夫人はすぐさま自分の手形の話をはじめたのですが、一息ついて、自分の貧しさを嘆き、『おねだりをし』、少しも遠慮というものがありませんでした。いつものように騒々しい音を立てて煙草を嗅いだり、いつものように椅子の上で思い思いに向きを変えたり、そわそわしたりしていました。自分が公爵夫人であることなど、彼女の頭からは抜け落ちてしまっているかのようでした。それに対して、ジナイーダは傲慢に見えるほどに厳格に、真の公爵令嬢としての態度を保っていました。彼女の表情は冷たく見えるほどに動かず、尊大さをたたえていました。そして、私にはこの新たな姿が麗しく思われたにも関わらず、彼女自身も、その目線も微笑みも、彼女とは思えなかったのです。

ジナイーダは、ふわりとした薄い紗で仕立てられた淡いブルーの花模様のドレスを着ていました。髪型はイギリス風に、長い巻き毛の房が両頬のあたりに垂れかかっている、この髪型が彼女の冷ややかな表情と

よく似合っていたのでした。私の父は食事の間ジナイダの隣に座っており、持ち前のスマートで落ち着いた礼儀正しさと彼女の相手をしていました。父が時折ジナイダをちらりと見やると、彼女もまた、時折父をちらりと見返すのですが、その眼差しときたらそれはもう奇妙なもので、ほとんど敵意を感じるほどなのです。二人の会話はフランス語で交わされていたのですが、ジナイダの発音の美しさに驚いたのを覚えています。公爵夫人は、食事の間も例によって全く遠慮というものをしらず、大いに食べては料理を褒めそやすのでした。

母は公爵夫人といるのが面倒らしく、どこか悲しそうに軽蔑して公爵夫人の相手をしていました。父は時折少し眉をひそめました。母はジナイダのことも気に入らなかったのです。

「あれは大した高慢な女ね。」と母は翌日に言いました。「まったく、何を鼻にかけているんだか。下品な娘みたいな顔をしてさ。」

「お前はどうか下品な娘を見たことがないようだな」と父が言いました。

「幸運なことにね。」

「幸運なんだろうが、それなのにお前に下品な娘を見分けることなんてできるものかね？」

ジナイダは私にほんの少しも注意を向けることはありませんでした。昼食が終わるとすぐさま、公爵夫人は別れの挨拶を始めました。

「あなた方の庇護を期待しております、奥様に旦那様。」と、公爵夫人は声を引っ張る様な調子で母と父に言いました。「仕方がないですよ！いいこともあったけれど、それも今は昔。この私だって、奥様なんですから」と、不気味に笑いながら、公爵夫人は

こう言い添えました。「食べるものがなかったら、名誉も何もあったものじゃないんです。」

父は公爵夫人に恭しく一礼し、玄関のドアのところまで送って行きました。私は例の丈の詰まった短い上着を着たまま、死刑判決を受けた囚人のごとく、床をじっと見つめていました。

ジナイダの私に対する態度のせいで、私はすっかり魂を取られたようになってしまったのです。

ジナイダが私の脇を通り抜ける際に以前のような優しさを感じさせるまなざしで私に「8時に私のところにいらしてね。いいわね。きっとよ。」と早口でささやいた時の私の驚きと言ったら、どれほどのものだったでしょう。私は両腕を広げるばかりでしたが、その時に白いスカーフを頭に巻いたジナイダは既に離れたところにいたのでした。

## 7章

8時きっかりに、私はフロックコートを着込み、前髪を小高く盛り上げて、公爵夫人の住む離れの玄関へ入って行きました。老僕は陰気な目つきで私を見やると、壁に固定された長椅子からしゅしゅ腰を上げました。客間からは、楽しそうな声が聞こえてきます。ドアを開けて、私は驚いて後ずさりしました。部屋の真ん中の椅子の上にお嬢さんが立っていて、紳士用のつばのある帽子を持っています。椅子の周りには、5人の男性がひしめき合っています。彼らは帽子の中に手を突っ込もうとしているのですが、ジナイダはその帽子を高く上へと持ち上げて、力いっぱい揺すっています。私に気がついたジナイダは、大声で叫びま

した。

「待って、待ってちょうだい！新しいお客様だわ、あの人にもくじをあげなくちゃ。」とひらりと椅子から飛び降りたジナイダは、私のフロックコートの袖口を掴みました。「ほら、行きましょうよ。何を突っ立てるの？皆さん、ご紹介しますわ。こちらはムッシュ＝ヴォルデマール。お隣の家のご息なの。そしてこちらが・・・」と、ジナイダは私に向かって順番に客人たちを示しながら付け加えました。「マレーフスキイ公爵、お医者様のルーシンさん、詩人のマイダーノフさん、退役大尉のニルマーツキイさん、そして軽騎兵のベロヴゾーフさん、彼にはもう会ったわよね。皆さん、どうぞよろしくね。」

私は誰にもお辞儀をできないほど当惑しました。私はまさにこの髪が黒く肌が浅黒い医者様のルーシンが、非情にも庭で私に恥をかかせた男だと分かりました。残りは私が知らない面々でした。

「伯爵！」とジナイダは続けて言いました。「ムッシュ・ヴォルデマールにくじを書いてくださらない？」

「それは不公平ですよ」とややポーランド訛りの言葉で伯爵は答えました。彼はたいそう美しく、粋な着こなして髪は暗い色、目は表情豊かで茶色、おちょぼ口の上の鼻は白くてほっそりとしており、口ひげが細い男でした。「彼は私たちと罰金ゲームをしてなかったのですよ」

「不公平ですよ」とベロヴゾーフと、退役大尉と呼ばれた男が繰り返しました。ニルマーツキイは 40 がらみで醜いほどのあばた面、黒人のような巻き毛、やや猫背でがに股、肩章をつけずボタンも留めずに軍用コートを羽織っている男でした。

「くじを書いてくださいと言っているの

すよ」と公爵令嬢は繰り返しました。

「私に逆らうのですか？ムッシュ・ヴォルデマールは初めて私どもの会にいらしたのですよ、そして今日彼にはルールは適用されないのですから。不平を言うことはないでしょう。どうか書いてくださいな、そうして欲しいのです。」

伯爵は肩をすくめ、おとなしく頭を下げると、宝石がついた指輪で飾り立てた白い手に羽ペンを取り、小さな紙を広げてそこに文字を書き始めました。

「ではせめて、どういうことなのかヴォルデマールさんにご説明いたしましょう。」と、嘲るような声色でルーシンが話し始めました。「そうしないと、すっかり途方に暮れていらっしゃるからね。いいですか、お若い方、僕たちは今、罰金ゲームをしていたんです。そして、お嬢さんが罰金を払う、つまり幸運なくじを引き当てた者がお嬢さんの手にキスをする権利を得るということなんですよ。私の言ったことは分かりましたか？」

私はただルーシンをちらりと見ただけで、ぼんやりと立ちつくしていましたが、お嬢さんは再び椅子の上に飛び乗ると、また帽子を左右に揺すり始めました。皆が帽子に手を伸ばしたので、私も他の人に続きました。

「マイダーノフさん」と、ジナイダが声をかけたのは、痩せこけた顔をした背の高い青年で、彼は小さくしょぼつかせた目をして、黒い髪をひどく長く伸ばしていました。「貴方は詩人なのだから、気前よく貴方のくじをムッシュ・ヴォルデマールに譲って差し上げるべきよ。彼のチャンスが 1 回ではなくて 2 回に増えるように。」

しかし、マイダーノフは嫌ですと首を横に振り、髪を勢いよく降り上げました。私は

皆の後に帽子に手を入れ、くじを掴み、開きました・・・何ということでしょう！くじの「キス」という言葉を見た私の気持ちになってみてください！

「キスだ！」と思わず私は叫びました。

「ブラヴォー！この人が引き当てたのね。」と、私の叫び声を受けてジナイダが言いました。

「ああ、嬉しい！」ジナイダは椅子から降りると、私の心臓が早く脈打ち出すほどに明るく甘い目線で私をちらりと見ました。「それで、あなたは嬉しいの？」と彼女は私に尋ねました。

「私ですか？」と私はどもりながら答えました。

「私にチケットを売ってくださいよ」と突然私の耳元でがちゃがちゃと騒ぎ立てたのはベロヴゾーフでした。「100 ルーブル差し上げますから」

私は、ジナイダが拍手を送るほどに怒りに燃えたまなざしで軽騎兵に返事をしてやりました。一方、ルーシンは「よくやりましたね！」と叫びました。「ですが、」と彼は続けて言いました。「私には、この会の進行係として全てルール通りに運んでいるかを見守る義務があります。ムッシュ・ヴォルデマール、跪いてください。そういう決まりですから。」

ジナイダは私の前に立ち、まるで私をより細かく観察できるようにといった様子で少し首を傾げ、尊大に片手を私の方に伸ばしました。私はめまいがしました。私は跪こうとしたのですが、両膝をついて倒れ、決まりが悪いことにジナイダの指に唇で触れてしまい、自分の鼻の先端がかすかに彼女の爪でひっかかれてしまいました。

「よろしい！」とルーシンは叫び私が立ち

上がるのを手伝ってくれました。

罰金ゲームは続きました。ジナイダは私をそばに座らせました。彼女はどんな罰でも思いつかないことはないのです。余談ですが、ジナイダは『銅像』をやることになったのですが、彼女は自分の台座として醜いニルマーツキイを選ぶと、うつ伏せで横になるよう命じたうえに、顔を胸へとうずめなさいとも命じたのです。笑い声は一瞬も止むことなく続きました。私は、格式ばった貴族の屋敷で幼年時代を過ごし、孤独で節度ある育ち方をしましたから、このような大騒ぎや喧騒、格式ばったことなど一切ない、ほぼ抑えのきかない浮かれ心、そして生まれて初めての見知らぬ人たちとの交流に、すっかり夢中になりました。私はワインを飲んだように、ただただ酔いしれていました。私が他の人より大声で笑ったり喋ったりし始めたので、隣の部屋にいた老公爵夫人が私を見にやってきたほどでした。公爵夫人は、イヴェールスキイ門あたりからどこぞの下級官吏を呼び寄せて、相談事をしていたのです。しかし私は、誰に馬鹿にされて笑われようが白い目で見られようが、どこ吹く風で気にもとめないほど幸せを感じていました。ジナイダは私をひいきにし続け、自分のそばから離しませんでした。ある罰で、私はジナイダと並んで同じ絹のショールに包まれる機会がありました。そうして、ジナイダに自分の秘密を打ち明けなければならないのです。

私の記憶に残っているのは、我々二人の頭が突然蒸し暑く半透明のかぐわしいもやの中に入ってしまったこと、このもやの中で彼女の目が親しく、優しく光り、開かれた唇が熱い呼吸をして、歯が見え、彼女の髪の毛先が私をくすぐってひりひりさせた



ことです。私は黙っていました。彼女はこっそり茶目っ気のみせて笑い、しまいには私に「ねえ、どうしたの？」などとささやいたのです。一方の私はただ顔を赤らめてニヤニヤしてそっぽを向き、息をつくのがやっとでした。私たちは罰金ゲームに飽きたので、ひも輪遊びを始めました。なんとということでしょう！私がぼんやりしているうちに彼女から激しい一撃を指に浴びせられた時の感激の大きさといたらありませんでした。それから私はわざとぼんやりしているふりをして見せたのですが、彼女は私をからかって、差し出されている手を叩くことはしなかったのです。

この夜会の間に私たちがしたことはまだまだあったのです！ピアノを弾き、歌い、踊り、ジプシーキャンプの真似をしました。ニルマーツキ＝イは熊の扮装をさせられて塩水を飲ませられました。マレーフスキ伯爵は私たちに様々なカードの手品を見せ、最後にカードをシャッフルしてホイスト用に全ての切り札を自分のところに集め、ルーシンの「僭越ながらお祝い申し上げます」という言葉で締めくくったのです。

マイダーノフは、自作の『人殺し』という詩の 1 節を朗読しました（舞台設定はロマン主義の全盛期でした）。彼はこの作品を、黒い表紙にタイトルの文字色を血のような赤にして出版するつもりなのです。イヴェールスキイ門から来た下級官吏の膝から帽子をくすねて、返してほしければコサックダンスをするよう無理を言ったり、老僕のヴォニファーチイに女性用の室内帽を被せたり、お嬢さんが男性用の帽子を被ったり・・・数えきれないほどです。ただ一人ベロヴゾーフだけが、徐々に部屋の隅に

引っ込み、顔をしかめ、腹立たしそうでした・・・。時折目を血走らせ、顔中真っ赤になるので、今にもこちらへ突進して私たちを木っ端微塵に四方八方へ蹴散らさんばかりに思えましたが、ジナイーダがベロヴゾーフの方をちらりと見やり、人差し指をたてて、だめよ、とたしなめると、ベロヴゾーフは再び部屋の隅に身を潜めるのでした。

ついに、私たちは力尽きてしまいました。公爵夫人は、彼女自身が言うには、こういうことは得意な質で、いくら騒がれても困らないそうなのですが、その公爵夫人が疲れたから休みたいと言い出しました。

夜 11 時過ぎに古く乾いたチーズの塊と、細かく刻んだハムが入った妙に冷めたピロシキが夜食に出されましたが、このピロシキは私にとってどんなパイ料理よりも美味しく思われるものでした。ワインは全部で一瓶だけありましたが、その瓶はどこか奇妙でした。色は暗く、首が膨れており、入っているワインはピンク色のペンキのような色だったのです。しかし、それには誰も口を付けませんでした。疲労から生じる幸福感を感じながら、私は離れを後にしました。別れの際、ジナイーダはしっかりと私の手を握り、また謎めいた微笑みを浮かべました。

私の火照った顔に、夜の重苦しく湿った風が吹きつけました。雷が鳴りそうでした。雨雲は空中を這い上がるように大きくなり、煙のような輪郭を埋め尽くしていくようでした。風が暗い森の中で騒々しくうなり、空のはるか向こうでは、どうやら雷鳴が響きはしないものの激しくうなっているようでした。

私は裏口を通過して自分の部屋に入りました。うちのじいやは床の上で寝ていたの

で、私は彼を跨がざるを得ませんでした。彼は目を覚ますと、私を見て、母がまた私に腹を立てじいやをよこそうとしたこと、しかし父が母を引き留めたこと（私は母におやすみを言うことも祝福をお願いすることもせずに床に就いたことはなかったのです。）を知らせました。仕方が無かったです！

私は爺やに、自分で着替えて寝るからと伝え、蠟燭の火を消しました。ですが、私は着替えることも寝ることもしませんでした。

少し椅子に腰掛けると、私はまるで魔法にでもかかったかのように長いこと座ったままでいました。私の味わった感覚は、とにかく未知で、甘美なものでした……。私は、ほんの僅かにあたりを見回すのみで、身じろぎもせずに座ったまま、ゆったりと呼吸をして、ただ時折声を立てずに思い出し笑いをしたり、『僕は恋をしているんだ、まさに恋だ、これこそが恋なんだ』と考えては、内心ひやりとするのでした。ジナイダの顔が、闇にまぎれて目の前を静かに漂いました。漂ってはいますが、消え去ることはありません。その唇には相変わらず謎めいた微笑みが浮かんでいて、私をすこし脇から見つめるその眼差しは、探るようでありながら、物思わしげで、それでいて優しく……。先ほど別れたときと同じような眼差しなのです。ようやく私は立ち上がると、つま先立ちでベットへ近づき、着替えもせず、枕に頭をそっとのせました。さながら、自分の激しい身動きによって、私の心を満たしているものが脅かされはしないかと心配してたかのようでした。

私は横になりましたが、目も閉じずにいました。まもなく私は、かすかな照り返しの

ような光が、部屋の中へ度々射し込んでくることに気づきました。私は頭をもたげ、窓の方へ視線を向けました。薄っすら白くなった神秘的な窓ガラスが、窓枠をくっきりと浮かび上がらせています。『雷雨だ』と私は思いました。それは確かに雷雨だったのですが、とても遠くを通過しているせいか、雷鳴も聞こえませんでした。ただ、鈍い光の、長く枝分かれしたような稲妻が絶え間なく走っています。その稲妻はきらめくというよりは、むしろ死にかけた鳥の羽根のごとく震え、時折ぴくぴく痙攣しているかのようでした。

私は起き上がると、窓の方へ行き朝までずっと立っていました。稲妻は一瞬たりとも収まることはありませんでした。俗にいうところの「スズメの夜」だったのです。私は静まり返った砂原、ネスクーチュヌイ公園の林、遠くの建物の黄色がかった外壁を見ており、それらの光景がまるで弱弱い稲光の度に震えているように見えました。私は、目をそらすこともできず、この静かな稲妻を見ており、この控えめな光が私の中で同じく燃えている秘めた衝動にシンクロしているように思われました。朝がやってきて、朝焼けが深紅の斑とともに始まりました。日の出とともにすべてのものが青白く染まり、稲妻は減っていききました。日が昇ったことで、物事を正常に戻すに違いない光に満たされて稲妻による振動は次第に減っていき、とうとう消えてしまいました。

私の中でも私の稲妻は消えてしまいました。私は大変な疲労感と静けさを感じましたが、ジナイダの面影は私の魂の上に荘厳に存在し続けていました。その面影は、安心しているように見えました。まるで、沼の草地から飛び立って、周りにいる他の

醜い鳥たちから離れた白鳥のように。そして私は眠りにつきながら、最後に、別れ際の信頼に満ちた熱愛の気持ちでその面影にすがりついたのです。

おお、穏やかな気持ちよ、心地よい音よ、傷ついた魂の思いやりと静寂よ、そして恋の初めての感動から来るうっとりとした喜びよ、あなた方はどこにいますか？どこに行ってしまったのですか？

## 8 章

翌朝お茶を飲みに下へ降りたとき、母は私を叱りましたが、私が思っていたほどの叱り方ではありませんでした。そして、昨夜はどのようにして過ごしたのか、私に話すよう言いました。私は多くを語らず、詳細を大幅に省きつつ、全体的にあどけなさを印象づけるよう努めました。

「やはり、ろくな人たちではないわね。」と母は言いました。「だから、あんな人たちと付き合ってはだめよ。それよりも試験勉強を頑張りなさい。」

私の勉強に関する母の心配は、この程度の指摘で終わってしまうのを知っていたから、私は口答えをしないことにしました。しかし、お茶の時間の後で、父は私の腕をとって庭に連れ出すと、私がザセーキン家で何を見てきたのか全て話すよう言ったのです。

父は私に奇妙な影響を及ぼしており、私たちの関係性もまた奇妙なものだったのです。父は私の教育にはほとんど関わっていませんでしたが、私を傷つけることもありませんでした。父は私の自由を尊重し、言うなれば丁寧な接し方さえしていたのです。ただ、父は私を自分に近寄らせることはありませんでした。私は父を愛し、父に

見とれており、父は私にとって男性の見本であったのです。ああ、もしも常に私が自分を払いのける父の手を感じる事がなかったなら、私は熱烈に父との結びつきを感じていたことでしょう。それに対して、父は望む時にほぼ一瞬で、一言で、一つの動きで父に対する計り知れないほどの信頼を私の心の中に生じさせることができたのです。私は分別ある友人や寛大な教師と話すように父と話しをしていました。それから父は突然私を残して去ったのです。父の腕は私をまた優しくそっと、でも確かに払いのけたものでした。

父は時折うきうきしていることがあるのですが、そのときはまるで子どものように私とはしゃいだり、ふざけたりすることを厭いませんでした（父は激しい運動なら何でも大好きでした。）。一度だけ、後にも先にも一度だけでしたが、とても優しく私を撫でてくれたことがあって、泣き出しそうになりました……。ですが、父のうきうきした気持ちも優しさも跡形もなく消え去ってしまうので、父が私を撫でてくれたことが、以後いかなる期待も抱かせることはなく、あたかも全ては私の夢の中で起こったかのようなようでした。時折あったのですが、知的で美しい、輝くような父の顔立ちをじっと見ていると、胸がどきどきしてきて、身も心も父に惹きつけられてしまうのです……。すると父は、私のそうした気持ちを感じ取ったかのように、通りすがりに私の頬に軽く叩くと、どこかへ去っていってしまうか、何かをし始めるか、まるで父だけに備わった能力であるかのようなようでしたが、突然にすっかり冷たくなってしまいます。なので、私はたちまち萎縮してしまい、こちらまで冷たくなってしまいました。

父が私に対して珍しく好意を爆発させたことは私の無言で分かりやすい懇願によるものであったことは一度もありませんでした。その爆発はいつも不意に発生したのです。その後、私は父の性格について思いを巡らせて、父は私にも、家庭生活にも関わっている場合では無いのだという結論に至りました。父は他のことを愛していて、その他のことによる楽しみにすっかり浸っていたのです。「できる限りのことを自分で掴め、そして他の人に捕まるな。自分は自分のものだ。そうやって生きることに人生の意味があるのさ」とある日父は私にそう言いました。別の日に私は一人の若き民主主義者として父の前で自由について論じました。(その日父は、私が言うところの「良い」状態で、そんな時には彼にどんな話題でも話すことができたのです)

「自由か」彼は繰り返しました。「お前は何が人に自由をもたらすか知っているか？」

「何でしょう？」

「意志さ。自分の意志、それは自由よりも良い権力というものをもたらしてくれる」  
自分自身の意志を欲することができれば、自由の身にもなれるし、人に采配を振ることもできる。」

父は、まず何よりも、とりわけ生きることを欲していましたし、そのように生きたのです。もしかしたら、父は自分が人生の「愉しみ」を長くは味わえないことを予感していたのかもしれませんが。父は、42歳で亡くなりましたから。

私は、ザセーキン家を訪れたときの話を父に詳しく語って聞かせました。父はベンチに座って、鞭の先で砂の上に何か描きながら、私の話を半ばきちんと、半ばうわの空で聞いていました。父は、時折軽く微笑

み、一種輝きに満ちた眼差しで面白そうに私をちらちら眺めては、私に短い質問をしてきたり、その答えに対して言い返したりするなどして私を焚き付けてきたのです。最初は、ジナイーダの名前を口にする気さえなかったのですが、私は抑えることができずにジナイーダを絶賛し始めました。父は終始、微笑みを浮かべていました。それから父はじっくり考え込んでいましたが、伸びをして立ち上がりました。

私は、父が出がけに馬に鞍を付けるよう命じたのを思い出しました。父は乗馬の名手でした。レリー氏よりもはるかに前から、相当な荒馬の調教ができたのです。

「お父さん、私も一緒に参りましょうか？」私は尋ねました。

「いや」彼はそう答えると、顔には普段通りの冷淡ながらやさしげな表情が現れました。「行きたいなら一人で行きなさい。でも御者には父は行かないのだと言いなさい」

父は私を背にして、さっさと行ってしまいました。私は父を目で追いました。父は門の向こうに消えました。私は、父の帽子が垣根に沿って動いているさまを見ていました。父はザセーキン家に入ったのです。

父はザセーキン家に1時間も滞在しませんでした。すぐに町へ出かけ、やっと家に戻ってきたのは夕方のことでした。食事の後、私は一人でザセーキン家に向かいました。客間に1人である老公爵夫人を見つけました。

私の姿を見ると、公爵夫人は室内帽を被った頭を編み棒の先で搔き、いきなり請願書を一通清書してもらえないかと頼んできました。

「喜んで」と私は答え、椅子の隅にちょっと腰掛けました。

「ただし、いいこと？字は少し大きめにしてくださいな。」と、公爵夫人は書き汚れた紙を一枚、私に渡しながら言いました。「今日中には無理かしらね、お坊ちゃん。」

「本日清書してしまいます。」

隣の部屋に続く扉が少し開き、その隙間からジナイーダの顔が見えました。その顔は青白く、物思いにふけている様子で、髪の毛は無造作に後ろにまとめられていました。彼女は私をその大きく冷ややかな目で見ると、静かに扉を閉めました。

「ジーナ、ジーナ！」と老公爵夫人は繰り返し言いました。

ジナイーダは呼びかけに応じませんでした。私は老公爵夫人の請願書を持ち帰り、夕方の間ずっとその仕事に専念していました。

## 9 章

私の「情熱」はその日から始まったのです。初めて勤めに出た人が感じるはずのことを私がその頃感じていた気がします。私はただの青少年でいることは止めました。私は恋をしていたのです。私はその日から私の情熱が始まったと言いました。さらに言うなら、私の痛みもまさにその日から始まったのです。ジナイーダのいない時間が辛かったのです。その間は何も頭に入っていないわ、何も手につかないわで、来る日も来る日も一日中根詰めて彼女のことを考えていたのです。私は苦しんでいましたが、彼女がいるときにも楽になることは無かったです。私は嫉妬をし、自分つまらない人間だと考え、愚かにも腹を立てたり、へつらったりしていました。それでも、抗えない力が私をジナイーダに引き寄せ、毎度毎度喜びのあまり気が付くと震え

ながら彼女の部屋へ入っていったのです。ジナイーダは私がほれ込んでいるのにすぐに気づきましたが、当の私はそれを隠そうとは思っていませんでした。ジナイーダは私の情熱を面白がって、私をからかったり、甘やかしたり、困らせたりするのです。

相手にとっての至上の喜びや底知れぬ悲しみの唯一無二の源泉が自分であり、相手を思いのままに、大人しくする理由が自分であるなら嬉しいことですが、私ときたら、ジナイーダの手の中でまるで柔らかい蠟のようになっていました。ですが、私だけがジナイーダに夢中だったわけではありません。ザセーキン家を訪れていた全ての男性がジナイーダに夢中でした。そしてジナイーダの方は、自分の足元に彼ら全員を鎖でつなぎ留めていました。ジナイーダは、男性たちに期待を抱かせたり、不安を煽ったり、気まぐれに彼らを振り回して（ジナイーダはそれを、人間同士のぶつけ合い、と呼んでいました。）楽しんでいました。ですが、男性たちは逆らうどころか、喜んでジナイーダに従っていました。生みなぎる美しいジナイーダの身も心にも、計算高さとお気楽さ、わざとらしさと単純さ、大人しさとお転婆さが、どこか特別な魅力をもって混ざり合っていました。ジナイーダの言うこと成すこと、あらゆる身のこなしには、微妙ですが軽やかな魅力が漂っていて、ジナイーダらしい溢れんばかりのエネルギーが全身に満ちみちていました。表情もくるくると変わり、澁刺としていました。冷ややかな表情、物思わしげな表情、情熱的な表情がほぼ同時に浮かぶのです。

この上なく多種多様な感情が、風がある晴れた日の雲の影のごとく軽やかに足早

に、そしてひっきりなしにジナイーダの目や唇に現れては消えていくのでした。ジナイーダは、彼女の崇拜者の一人ひとりが必要としていました。ジナイーダが時に「私の獣」、時にただ「私のもの」と呼んでいるベロヴゾーロフは彼女を追ってなら喜んで火にも飛び込みかねない男でした。彼は自分に知能やその他の長所があるとは思わずに、他の男たちは無駄話をしているにすぎないのだと吹き込みながら彼女に求婚してばかりいました。マイダーノフはジナイーダの気持ちに詩的な音楽で答えていました。ほぼ全ての作家同様にずいぶんと冷淡だった彼は、自分はジナイーダを愛しているのだ、延々と続く詩で彼女を賛美しているのだ、どこか不自然だけれど心から湧き出る感動の気持ちからそれを朗読しているのだ、と彼女に、もしかすると自分にも断言していたのです。

ジナイーダはマイダーノフに共鳴しつつも、若干彼をからかってもいました。マイダーノフをあまり信用していなかったジナイーダは、彼の告白を散々聞いた後には、プーシキンを朗読させていました。ジナイーダが言うには、これは空気をきれいにするためなのです。ルーシンは、嘲笑癖のある、皮肉めいた物言いをする医者でしたが、誰よりもジナイーダをよく分かっていました。誰よりも彼女を愛していながら、影でも面前でもジナイーダを悪く言うのでした。ジナイーダはルーシンを尊敬していましたが、ルーシンのことを大目に見ることはせず、時折気味が悪いくらい格段に楽しそうに、彼もまた自分の手中にあるのだと、ルーシン自身が感じられるよう仕向けるのです。「私はコケットですから、心なんてないの。女優気質なのよ。」と、ある日ジナイーダは私のいるときにルーシンに言い

ました。「なら、いいわ！でしたらお手を出して。私がピンで刺してあげますから。こんなお若い方の前ですもの、恥ずかしくても、痛くても笑っていただくわ、正直者さん。」

ルーシンは顔を赤らめ、そっぽを向いて唇をかみしめましたが、しまいには腕を差し出しました。ジナイーダがピンを突き刺したその瞬間に、ルーシンは笑い出したのです。そしてジナイーダも思い切り深くピンを突き刺したり、ルーシンが助けも来ないのに目を泳がせているその目を見つめたりしながら笑っていたのです。

ジナイーダとマレーフスキー伯爵の関係性は何よりも理解しがたいものでした。マレーフスキーは美男子で、機転が利き知恵もありましたが、どこか信用しがたく、16歳の少年だった私から見ても何かを偽っているように見えました。そして私は、ジナイーダがそれに気づいていないことに驚いたのです。あるいはその偽りには気づいていたけれど軽蔑することもなかったのかもしれない。誤った教育、おかしい知人たちと習慣、いつも母と一緒にいること、家庭内の貧しさと無秩序、それら全てが、若いお嬢様が享受していた「自由」と、取り巻きたちよりも優れているという自意識から、彼女の中に半ば他人を蔑むような横柄さと無頓着さを育て上げてしまったのです。

ヴォニファーチイが「砂糖がありません。」と報告に来ようと、何かろくでもない噂が流れようと、客人たちが言い争いをしよう、とにかく何が起ころうとも、ジナイーダは巻き毛を振り払って「バカバカしい！」と言って、気にもとめません。

それゆえ私は、マレーフスキーのことで全身の血が煮え立つことがよくありまし

た。ジナイーダのそばへ、まるで狐のようにずる賢そうに軽く身体をゆらしながら近寄ると、ジナイーダの椅子の背に優雅にもたれかかり、得意げながらジナイーダに取り入るような笑みを浮かべながら、ジナイーダの耳元でささやき始めるのです。するとジナイーダは腕を組んで、まじまじとマレーフスキイを見つめているのですが、やがてジナイーダもほほ笑みを浮かべて首を横に振るのです。

「何が楽しくてマレーフスキイさんを家へ招き入れるんですか？」と、ある日私はジナイーダに尋ねました。

「だって、あんなに口ひげが素敵なんですよ。」と、ジナイーダは答えました。「でも、そんなこと貴方には関係ないわ。」

また別のときに、ジナイーダは私にこう言いました。「私がマレーフスキイさんのことを愛しているなんて思っていないわよね？ 違うのよ。だって私、自分が上から見下さなければならぬ人なんて愛せないもの。私を征服してくれるような人でないとだめなの・・・でも、そんな男性となんて出会えるわけないわ。ああ、よかった！私は誰のものにもならないわ、絶対に！」

「すると、絶対に人を愛さないということになりますね。」

「あら、貴方のことはどうなるの？ 私が貴方のことを、愛していないって言うの？」と、ジナイーダは言い、手袋の先で私の鼻を叩きました。

そう、ジナイーダは私をずいぶんからかっていたのです。3 週間の間、私は毎日彼女に会っていました。そしていつも決まって何か突飛なことを私に仕掛けたのです。我が家にジナイーダがやってくることはまれでしたが、残念だとは思いませんでした。というのも、我が家では彼女はすっか

りお嬢様、公爵令嬢に様変わりしてしまい、私は決まりが悪かったからです。私は母に本当のことが漏れてしまうことを恐れていました。母はジナイーダに敵意を持っており、私たちのことを意地悪く監視していました。父のことを私は恐れていませんでした。父はどうも私を気に留めていないようで、ジナイーダともほとんど話しませんでした。父のことは私は恐れていませんでしたが、どこか極端に知的で思わせぶりの態度でいました。私は勉強も読書もやめてしまい、馬に乗って周辺を散歩することさえやめてしまいました。足を縛られたカブトムシのように、私はいつも愛する離れの周りをぐるりと回っていました。永遠にそこにいてしまうような気さえするのです。しかし、そんなことはできませんでした。母が私に愚痴を言うし、時にはジナイーダの方から私を追い払うこともあったのです。その時には自分の部屋に閉じこもるか、庭の隅の方まで行って、岩でできた背の高い温室の残骸に上り、道に面している壁から足を垂らし、決まった時間に腰かけ、何を見るときもなく眺めたものでした。

私のそばでは、ホコリまみれになったイラクサのあちこちを、何匹か白い蝶々が物憂げに舞っています。元気なスズメが一羽、近くにある半分割れてしまった赤レンガの上に止まっていて、絶えず全身でくるくる向きを変えながら、小さな尾を広げると、苛立ったようにさえずっています。相変わらず、疑り深いカラスが数羽、葉の落ちてしまった白樺の高い高いてっぺんに止まって、時折カアカアと鳴いています。太陽と風が、まばらな白樺の枝の間で静かに戯れ、ドンスコイ修道院の鐘の音が、時折静かにわびしく響いてきます。私は座ったまま、まわりを眺めたり、耳を澄ませたりしているうちに、何か言葉では言い表せない

ような感覚で身も心もいっぱいになりました。この感覚には、寂しさや喜び、未来の予感、希望、そして生きることへの畏れといったあらゆる感情が含まれていたのです。しかし、そのときの私にはそんなことは理解できず、自分の中で成熟していくあらゆる感覚のうち、どれ一つとして名付けようがなかったでしょう。あるいは、それら全てを、ジナイーダという一つの名で言い表したかもしれません。

一方でジナイーダはいつもネコがネズミとじゃれあうように私をあしらっていました。ジナイーダが私の気を引いて、私が興奮してうっとりすることもあれば、突然にジナイーダが私を遠ざけ、私がジナイーダに近づくことも見ることもできなくなることもありました。

確か、ジナイーダが数日にわたって私に冷たくしたことがありました。私は完全に怖気づき、恐る恐るジナイーダを求めて離れに行き、老公爵夫人は悪態をついたり叫んだりしていたにも関わらず、彼女の近くに居座ろうと努めたものでした。老公爵夫人の手形の問題はうまくいっておらず、彼女は既に二度も警察署長に釈明をしていたのです。

ある日私があの垣根の近くの庭を通りがかったときに、ジナイーダを見つけました。彼女は両手をついて草地に座り、身動き一つしていませんでした。私はそっと離れようとしたのですが、ジナイーダが突然頭を上げてこちらに命令するような合図を送ってきたのです。

わたしはその場に立ち尽くしました。ジナイーダの合図の意味が一度では分からなかったのです。ジナイーダは合図を繰り返しました。

私は急いで垣根を飛び越えると、喜んでジナイーダに駆け寄りました。しかし、ジナイーダは私を目で制して、自分から程近い小道を指し示しました。困惑した私は、どうすればいいのかわからず、小道の際に膝をつきました。ジナイーダはひどく青ざめていて、痛ましい悲しみや深い疲れが色濃く顔立ちのあらゆるところに表れていたのです。私は胸が締め付けられ、思わず呟きました。

「どうしたのですか？」

ジナイーダは片手を伸ばし、何かの草をむしって噛むと、ぼいと向こうへ投げました。

「私のことをとても愛してるのね？」とようやくジナイーダは尋ねてきました。「そうなんでしょう？」

私は何も答えませんでした。いまさら何を答える必要があるでしょう。

「そう、」と、ジナイーダはそのまま私を見ながら繰り返し言いました。「それはそうよね。同じような目をしてるもの。」と言いついたジナイーダは物思いに沈んだかと思うと、両手で顔を隠しました。「何もかもが嫌になってしまったの。」とジナイーダは囁きました。「世界の果てへ行ってしまえたらどんなにいいか。こんなの我慢できなし、どうすることもできないわ...それに、私はこれからどうなってしまうの？ ああ、辛いわ...なんて辛いのかしら！」

「どうしてです？」と私はおどおどしながら尋ねました。

ジナイーダは私に言葉を返さず、ただ肩を



すくめただけでした。

私は膝をついたまま、深い憂鬱に沈みながらジナイーダを見ていました。彼女の一言一言が私の心に突き刺さりました。この時、私は彼女の悲しみを鎮める、そのためにでも命を捧げたい気持ちになっていました。私はジナイーダを見つめました。それでもなぜ彼女が辛いのか見当がつかず、私はジナイーダが突然発作のように抑えがたい悲しみに襲われ、庭に出て行って、足が立たなくなったかのように地面に倒れたところを強く想像しました。辺りは明るく、青々としていました。風が木々の葉を揺らし、ジナイーダの上にあるエゾイチゴの長い枝を時折揺らしていました。どこかでハトが鳴き、ミツバチはブンブンと音をたて、それほど茂っていない草地を低空飛行していました。空は上空から優しい青色を呈しています。しかし私はひどく悲しかったのです。

「何か詩を読んで」とジナイーダが小声でつぶやき、肘に身体を預けました。

「私、あなたが詩を読んでいる時間が好きなの。あなたは歌うように詩を読むけれど、それでいいの。若々しいもの。」

『グルジアの丘の上で』を聞かせて。でも、まずはお座りなさい。」

私は座って、『グルジアの丘の上で』を読んで聞かせました。「心は、愛さないなど出来はしない」と、ジナイーダが繰り返しました。「ここがこの詩のいいところじゃなくて？この詩は、この世にないものについて語っているの。この世にないものの方が、この世にあるものよりもずっと素晴らしいうえに、真実よりも真実らしいとさえ言ってるのよ...心は、愛さないなど出来は

しない。愛さずにいられたなら、どんなにいいかしら！」

ジナイーダは再び黙りこくっていましたが、突然はっと我に返り、立ち上がりました。「行きましょう。お母様のところに、マイダーノフさんがいらしてるの。自作の詩を持ってきてくださったのに、放ったらかしにしてしまったわ。今頃彼もがっかりしてるわね...でも、仕方がないの！いつの日かきっと、貴方にも分かる日が来るわ...でも、私のことを怒ることだけはしないでね！」

ジナイーダは慌しく私の手を握ると、私の前を走りだしました。私たちは離れに戻ってきました。

マイダーノフは印刷されたばかりの「人殺し」を私たちに読み聞かせ始めましたが、私は聞いていませんでした。彼は4歩格の弱強格を歌うように大声で読み、韻が入れ替わっては響くようすはまるで小さな鈴のようでしたが、中身はからっぽで、うるさいだけでした。私はジナイーダを見つめ、ずっと彼女の最後の言葉の意味を理解しようと必死でした。

「あるいは、ことによると秘密の恋敵は思いがけず君を虜にしてしまうかもしれない」

とマイダーノフは突然鼻にかかった声で叫び、その時に私とジナイーダの目が合いました。ジナイーダは目を伏せると、かすかに顔を赤らめました。私はジナイーダが顔を赤らめ、驚きのあまりぞっとしているのを目に留めました。私は以前から彼女に焼きもちを焼いていましたが、この時ばかりは、「ジナイーダは恋をしたんだ」とい

う考えが頭に浮かびました。「何ということだ、ジナイーダが恋をしたなんて。」

## 第 10 章

私の苦悩はこの瞬間から始まりました。頭を悩ませたり、考え込んだかと思えば、また考え直したり。そして、できる限りそつと、執拗にジナイーダを監視していました。ジナイーダの中に変化が起こったのは明白でした。ジナイーダは散歩へ出かけると、長いこと散歩から帰りませんでした。時々ジナイーダは、客人たちの前に姿も見せず、長いこと部屋に引きこもりました。以前には、こんなことはなかったのです。私は突然に、極めて勤がよくなり、いえ、よくなったような気がしました。「あいつじゃないかな？いや、実はこいつじゃないかな？」と、ジナイーダを恋慕う一人ひとりを不安げに思い浮かべながら、自問自答していました。(こんなことを考えるのは、ジナイーダに対して憚られるのですが、)マレーフスキイ伯爵が最も危ないのではないかと心ひそかに思っていたのです。

私の観察眼は視野が狭いもので、またおそらく私が思いを隠していても誰も欺くことはできなかったのです。少なくとも医者ルーシンはすぐに私の思いに気づきました。しかし、彼自身も最近変わってしまったのです。やつれて、相変わらずよく笑ったのですがその笑いは以前よりもどこか悲しそうで、意地悪く短いものでした。気づかないうちに生じた神経質で興奮しやすい気質が、彼のかつてのスマートな皮肉や彼に染みついていた冷笑的な態度と取って代わってしまったのです。

「お若い方、どうして引切り無しにこちらに来るのですか？」ルーシンはある日ザセーキン家の客間で 2 人になった時私に尋ねました。(公爵令嬢は散歩からまだ帰ってきておらず、公爵夫人の叫び声が中二階に響いていました。夫人は小間使いと言いつ争いをしていたのです) 「若いうちは勉強して働かなければ。それなのに何をしているのですか？」

「私が自宅で勉強しているのかなんて分からないでしょう？」と私は横柄な態度を隠すことなく、一方で狼狽を隠すこともできないまま反論しました。

「自宅でどんな勉強ができるというのですか！勉強しようという考えなどお持ちではないのでしょうか。まあ、言い争うつもりはありませんよ。あなたの年頃にはよくあることですからね。しかしあなたの選択は非常に宜しくないですよ。この家がどんなところなのか、本当にお分かりにならないのですか？」

「貴方のおっしゃることが理解できないのですが。」と私は言いました。

「理解できないですって？それなら、いよいよいけませんね。私の義務だと思って、貴方に警告しておきましょう。我々の仲間や年のいった独り者なら、ここへ来たっていいんです。何も起こりっこないんですから！我々などは焼きを入れられて、何も浸み込んできやしません。ですが、貴方の肌はまだ柔いんです。だからね、ここの空気は貴方には毒なんです。本当ですとも、このままでは毒気にやられてしまうかもしれませんよ。」

「どうしてです？」

「どうもこうもありませんよ。今の貴方は健康だと言えますか？ご自分が正常であると言えますか？それに、貴方が感じていることは貴方にとってためになる良いものと言えますか？」

「だから、私が何を感じてるって言うんです？」と言いながらも私は、心の中ではルーシンが正しいとわかっていたのです。

「いやあ、お若い方、お若い方」とルーシンは言い続けるのですが、まるでこの「お若い方」という言い方で私をひどく怒らせようとしているかのようでした。「誤魔化そうとしてもダメですね。ありがたいことに、貴方の思っていることは顔に書いてありますから。ですが、わからせようとしたって無理ですね。この私だってね、もし（医者は歯を食いしばりました）自分がこんなに変わり者でなかったら、こんなところに来たりしませんよ。ただ私が驚いているのはね、君のように頭のいい人が、自分の身の回りで起こっていることになぜ気がつかないのかってことです。」

「ですから、一体何が起こってるって言うんです？」と私はルーシンの言葉を受けて、すっかり緊張してしまいました。

ルーシンは、一種嘲るような同情の眼差しで私を見ました。

「親切のつもりで言うのだが」と彼はまるで独り言のようにつぶやきました。「これは是非とも彼にお話ししておく必要がありますなあ。要するに」と彼は声を大にして言いました。「繰り返しますが、ここの空気はあなたには宜しくないものなのです。あなたはここにいて快適かもしれません

が、得るものは少ないでしょう？温室には良い香りが漂っているものですが、そこに住んではいけないのです。さあ、私の言うことを聞いて、カイダーノフの歴史の教科書にまた取り掛かりなさい」

公爵夫人が部屋に入ってきて、ドクトルに歯の痛みを訴え始めました。その後ジナイーダがようやく表れました。

「さあ」と公爵夫人が重ねて言いました。「お医者様、この子を叱ってやってくださいな。一日中氷が入った水を飲んでるのですから。胃が弱いというのに、こんなことをして良いものでしょうか？」

「どうしてそんなことをなさるのですか？」とルーシンは尋ねました。

「ではこれが何の原因になるっておっしゃいますの？」

「何の？風邪をひいて死んでしまうかもしれませんよ。」

「本当に？まさか？まあいいわ、当然の報いね！」

「これはこれは」とドクトルはぶつぶつ言いました。

公爵夫人は出ていきました。

「これはこれは。」と、ジナイーダはルーシンの言ったことを繰り返して言いました。

「生きるのってそんなに楽しいかしら？周りを見回してごらんなさい... どう、お分かりになって？それとも、私がそんなことも分からない、感じられないとでも思っているの？私、氷水を飲むと心が満たされるんですもの。それなのに貴方は、こんな人生が束の間の満足感を得るために危険を冒してはならないほどに大切なものだと、私にまじめにお説教なさるつもり？私はもう、幸せについて話しているわけではないの。」

「まあ、つまり。」と、ルーシンがちくりと言いました。「気まぐれで自己中心的... 貴女はこの 2 語に尽きます。貴女という人は、全てこの 2 語で言い表せますよ。」

ジナイーダは、ヒステリックに笑い出しました。

「親切なお医者様、診断書を出すのが遅いですよ。見立てが甘いと、手遅れになってしまいますわ。眼鏡をかけてくださいな。私は今や気まぐれどころの話ではないの。あなたをからかったり、自分をからかったりしたところで何が愉快だっていうの？では自己中心どころの話ではないとしたらどういう状態でしょうね、ムッシュ・ヴォルデマール？」と不意にジナイーダが付け加えて、足を踏み鳴らしました。「憂鬱そうな顔をしないで。私は同情されていると耐えられないの。」ジナイーダはそそくさと行ってしまいました。

「有害だ。お若い方、この空気はあなたには有害なんですよ」ともう一度ルーシンが私に言いました。

## 11 章

その日の晩、ザセーキン家にはいつもの取り巻きたちが集まっていました。私もその一員としてそこに居たのです。

話がマイダーノフの詩のことになると、ジナイーダは心からその詩を褒めていました。

「でもね、いいこと？」と、ジナイーダはマイダーノフにこう言いました。「もし私が詩人なら、もっと違うテーマを選んでた

わ。こんなの大したことないかもしれませんが、でも時折私の頭の中に浮かんでくる、変わったイメージなの。特に、眠れない夜の明け方、空がバラ色や灰色に染まってくる頃にね。私だったら、そうね...あなた方に笑われないかしら？」

「そんな！笑いませんとも！」私たちは声をそろえて叫びました。

「私なら、」ジナイーダは腕を組み、目線を脇に流して語り出しました。「若い女の子たちの集団が、夜中に、大きなボートに乗っているの。静かな川の上なのよ。月が輝いていて、女の子たちはみんな白い服を着て、白い花の冠を身に着けて、そうねえ、賛美歌みたいなものを歌っている。」

「分かります、分かります、続けてください。」と思わせぶりに、夢を見ているような調子でマイダーノフが言いました。

「すると突然、岸でざわめき、高笑い、松明、タンバリンの音がする。これはバックカスに仕える巫女たちの集団で、歌ったり騒いだりしながら走っている。詩人さん、ここが光景を描写する上で大事なところですよ。ただ私は松明が赤々として、もくもくと煙を出し、巫女たちの目が花冠の下で輝いていて、花冠は暗い色であってほしいと思っているだけなの。虎の毛皮、酒杯、それから金、たくさんの金も忘れないでくださいね。」

「どこに金が無ければならないのですか？」とマイダーノフは自分のぺちゃんこな髪を後ろに流し、鼻の穴を広げて尋ねました。

「どこにですって？肩、手、足の上、あらゆるところよ。古代の女性たちは、くるぶしに金の輪を付けていたと言うわ。バック

スの巫女たちは、ボートに乗っている女の子たちを呼び寄せている。女の子たちは讚美歌を歌うのをやめてしまうの。歌い続けることができないのよ。でも、女の子たちは身動きひとつしないの。川の流れが女の子たちを岸へと運んでいく。するとそのとき、1人の女の子が、静かに立ち上がるの...ここは上手に描写しないと。この女の子が月明かりのもとで静かに立ち上がる様子や、他の子たちが恐れ驚いている様子をね...女の子は1人、ボートのへりをまたぐと、バッカスの巫女たちはその子を取り囲んで、夜の暗闇へと瞬く間に連れ去ってしまうの...ここでは、煙が渦を巻いているところを描写していただきたいわ。全てがごちゃごちゃに混ざり合うのよ。聞こえてくるのはバッカスの巫女たちの甲高い声だけで、岸には女の子の花の冠だけが残されているの。」

ジナイーダは口をつぐみました。（「ああ、ジナイーダは恋をしている！」と、私はまた思いました。）

「それで、それだけですか？」マイダーノフは尋ねました。

「それだけよ。」ジナイーダは答えました。

「これですと、長編の叙事詩のテーマにはなりえないかもしれませんが」と、マイダーノフは勿体ぶったように言いました。

「ですが、抒情詩のテーマとして貴女のアイデアは使わせていただきましょう。」

「ロマン主義的なイメージなのですか？」マレーフスキイが尋ねました。

「もちろん、ロマン主義的なものよ。バイロン風なの。」

「ユゴーの方がバイロンよりも良いですよ。」と若い伯爵は遠慮せずに言いました。「それにもっと面白い。」

「ユゴーは一級の作家です。」とマイダーノフは言いました。「私の友人のトンコシェーエフも、彼のスペイン風小説「エル・トロヴァドール」の中で述べています」

「まあ、ひっくり返った疑問符がついているあの本のこと？」とジナイーダは話を遮りました。

「ええ、それがスペイン人の流儀なんですよ。私はこう言いたかったんです。トンコシェーエフは・・・」

「ねえ、あなたはまた古典主義とロマン主義について議論を始めようとしているよだけど」とジナイーダはまた彼の話を遮りました。「それよりもゲームをしましよ。」

「罰金ゲームですか？」とルーシンが話に加わりました。

「いいえ、罰金ゲームはつまらないわ。比喩遊びをしましよ（このゲームを思いついたのはジナイーダでした。何かテーマが決まった後、全員がそのテーマを何かに例え、最もよい比喩を出した人が褒美を得るというものでした。）

ジナイーダは窓に近づきました。日が沈んだばかりでした。空の高いところに長く赤い雲が浮かんでいました。

「この雲は何に似ているかしら？」ジナイーダは尋ね、我々の答えも待たずに言いました。「私、思いついたわ。あの雲は、クレオパトラがアントニーに会いに行った時に乗っていた、黄金の船についている深紅の帆に似ているわ。マイダーノフさん、

覚えていらっしゃる？最近私にお話ししてくれましたわね？」

私たちは皆、『ハムレット』のポローニアスのごとく、あの雲はまさにその帆を彷彿とさせる、誰もこれ以上に素晴らしいとえは思い浮かばない、と決めてしまいました。

「ところで、その頃アントニーは幾つだったのかしら？」と、ジナイーダが尋ねました。

「そりゃ、たぶん、若かったでしょう。」と、マレーフスキイは言いました。

「ええ、若かったですも。」マイダーノフは、肯定するように繰り返しました。

「失礼ですが」と、ルーシンが声を上げました。「既に 40 歳を超えていましたよ。」

「40 歳を超えていた。」さっとルーシンを一瞥し、ジナイーダはそう繰り返しました。

私はまもなく帰路につきました。「ジナイーダは恋をしたんだ。」と無意識に唇が囁きました。「相手は誰だろう？」

## 12 章

数日が経ちました。ジナイーダはますますおかしくて、理解しがたいもの【→理解しがたい女性】になりつつありました。ある日私が彼女の家に行くと、彼女が籐椅子に腰かけ、頭を机のとがった角に押し当てているのを発見しました。ジナイーダが姿

勢を正すと、その顔は涙ですっかり濡れていました。

「あら！貴方だったの！」ジナイーダは、無情にも薄笑いを浮かべて言いました。「こっちへいらっしゃい。」

私はジナイーダに近づきました。ジナイーダは私の頭に手を乗せると、急に私の髪を掴み、髪を捻り始めたのです。

「痛い…」遂に私は根を上げました。

「何よ！痛いですって！じゃあ、私が痛くないとでもいうの？痛くないって？」ジナイーダは繰り返しました。

「まあ！」わずかにひと房、私の髪の毛を引き抜いてしまったことに気づいたジナイーダは、突然叫び声をあげました。「何てことをしてしまったのかしら！可哀そうなムッシュ・ヴォルデマール！」

ジナイーダは引き抜かれた髪を注意深く真っすぐ伸ばすと、指に巻き付けて小さな指輪の形にしました。

「あなたの髪を私のロケットに入れて、これから身に着けるわ」と言ったジナイーダの目には涙が光っていました。「こうすればあなたは気が休まるかもしれないけれど・・・でも今はごめんなさいね。」

私が帰宅すると、家では不愉快なことが待っていました。母が、父と言い争いをしていたのです。母は何かのことで父を責め立てていました。父の方では、いつもどおり、冷淡かつ懇懇な態度で沈黙を守っていましたが、まもなくその場を立ち去りました。私には母が何を言っていたのか聞こえませんでしたし、聞き耳を立てている余裕はありませんでした。これだけは覚えているのですが、この言い争いの後に母は私を書斎へ呼び寄せると、私が足しげくザセーキン家を訪れていることに対して大いに不

満を示しました。母によれば、あの公爵夫人はどんなことでもしかねない女だ、と言うのです。私は母へ近づき、母の小さな手に口づけをすると（話を打ち切りたいとき、私はいつもこうしていました。）、自分の部屋へ戻りました。

ジナイーダの涙のせいで私はすっかり混乱してしまいました。私はどういう考えでいけばいいのか全く分からず、今にも涙が出そうになっていました。私は 16 歳であったにもかかわらず、赤ん坊だったのです。ペロヴゾーロフが日を追うごとに、まるで狼が羊を見つめるかのようにだんだんと恐ろしい目でマレーフスキー伯爵を見つめるようになっていったにもかかわらず、私は既にマレーフスキーのことをこれ以上考えなくなっていました。そう、私は何も、誰のことも考えていなかったのです。

判断力が鈍ってしまった私は、常に 1 人きりになれる場所を探していました。とりわけお気に入りだった場所は、廃墟と化した温室でした。よく高い壁へよじ登って、そこに座ったままじっとしていたものでした。そうしていると、自分がとても不幸で独りぼっちな哀れな若者のように思えて、我ながら惨めな気持ちになったものですが、とにかく私には、この惨めだという感覚が、酔いしれるほどに嬉しかったのです。

ある日私は壁に腰かけ、遠くを眺めながら鐘の音を聞いていました。すると突然、何かが目の前を走り抜けました。それはそよ風のようにそよ風ではなく、震えでもない、まるでそよぎ、誰かの親密さのような感覚でした・・・私は視線を落としました。下の道を、ジナイーダが軽やかな灰色のワンピースを着て、バラ色の傘を肩にか

けて大急ぎで歩いていました。ジナイーダは私を見ると、立ち止まり、麦わら帽子の端を上にもたらし、私にビロードのような目を向けました。

「そんな高いところで何をしていたらしゃるの？」とジナイーダはどこか異様な笑みを浮かべて私に尋ねました。「ほら」とジナイーダは続けて言いました「あなたについても、私を愛していると請け合っているでしょう。もし本当に私を愛しているなら、私がいる道へ飛び降りてちょうだい。」

ジナイーダが最後まで言い切らぬうちに、私はまるで誰かに後ろからポンと押されたかのように、下へ飛び降りていました。壁の高さは 4 メートル近くありました。私は地面に足をつきましたが、着地の衝撃がとても強く、身体を支えきれませんでした。私は倒れ込み、一瞬気が遠くなりました。我にかえった私は、目を開けずとも、側にジナイーダがいることがわかりました。

「私の可愛い子。」ジナイーダは、私の上に身をかがめながら言いました。その声は、私を心配する優しさが感じられました。「どうしてこんなことができたの、どうして私の言うことなど聞くの... 私だって貴方を愛してるのよ... 起きて。」

ジナイーダの胸が私のすぐそばで息を吸い、両手は私の頭を撫でていました。すると突然、あのとき私の身に何が起こったというのでしょうか！ジナイーダの柔らかく爽やかな唇が、私の顔中にキスの雨を浴びせたのです... その唇は、私の唇にも触れました... しかしこのときジナイーダは、恐らく私の表情から、未だに目を閉じてはいるものの、既に私の意識が戻っていることを察したのでしょうか。素早く身を起こして、こう言いました。

「ほら、起きてちょうだい。向こうみずな悪戯っ子さん。埃まみれになって、いつまで寝ているおつもり？」私は起き上がりました。

「私の傘を取ってきてちょうだい。」とジナイダは言いました。「ほら、あんなところまで傘を放り投げてしまったじゃない。そんな目で私を見ないで・・・なんて間抜けな人なの？打撲していない？どうやらイラクサが刺さったみたいね？私を見ないでって言っているのよ・・・ああ、彼は【→この子ったら】何もわかっていないし答えもしない。」とジナイダは独り言のように付け加えました。「ムッシュ・ヴォルデマール、家に帰って身体をきれいになさい。私についてきては駄目よ。そんなことをしたら私は怒って、もう二度と・・・」

ジナイダは最後まで言い切らずに、さっさと行ってしまい、私は道端に座り込みました... 立ってなどいられなかったのです。イラクサで手がチクチク痛み、背中には鈍い痛みを感じ、頭はくらくらしていました。ですが、このときに味わった至上の幸福感は、その後の人生においても、二度と繰り返されることはありませんでした。この至上の喜びは、私の身体中に甘美な痛みとして宿っていたのですが、遂には有頂天になって飛び跳ねたり、歓喜に満ちた叫び声となって解放されたのでした。全くもって、私はまだ子どもだったので。

### 第 13 章

私はその一日中非常に愉快で誇らしく、顔にジナイダのキスの感触がまざまざと思い起こされ、感動のあまり身震いしながらジナイダの全ての言葉を思い出し、思

いがけない幸せをいとおしんでいました。その感覚は、自分でも次第に恐ろしくなり、その新しい感覚を引き起こしたきっかけとなったジナイダに会いたくなくなるほどのものでした。私は、もうこれ以上運命に期待することはできない、今となつては「最後に十分に息を吸って、死んでも構わない」と思いました。だからこそ、その翌日、私は離れに向かいながら、大きな不安を感じつつありました。私は、自分は秘密を隠せるのだと知らしめたい人にふさわしい、慎ましい厚かましさとという仮面の下に、理由もなくその不安を隠そうと努めました。

ジナイダは私に対して、少しも心を乱すことなく、極めてさばさばしていましたが、人差し指を立てて「青あざなどできていないわよね？」とだけ尋ねてきました。私の抱いていた慎ましい厚かましさと秘密は、皆一瞬にして消え去ったばかりか、それらとともに戸惑いさえも消えてしまいました。もちろん、何か特別なことを期待していたわけではないのですが、ジナイダの平静さに、私はまさに冷や水を浴びせ掛けられたかのようなのでした。ジナイダの目に映る私は子どもなのだと気づき、とても辛くなったのです！ジナイダは部屋の中を行ったり来たりして、私をちらりと見ては、さっと微笑みを浮かべるのでした。しかし、ジナイダの気持ちがとても遠くに行ってしまったことが、私にははっきり分かりました... 「いっそのこと、自分から昨日の話を切り出してみようか。」と私は考えました。「あんなに急いでどこに行くところだったのか、はっきりさせたいから聞いてみようか。」しかし、私はただ片手を振るのみで、部屋の片隅に腰を下ろしました。

ベロヴゾーフが部屋に入ってきました



た。私は彼の来訪を喜びました。

「あなた用のおとなしい乗用馬が見つかりません」とベロヴゾーロフが暗い声で話し始めました。「フレイターグが私に 1 頭確保したと言ってきました。でも私はおとなしい馬かどうか自信がないのです。ああ恐ろしい。」

「何を恐れているの？」とジナイーダが尋ねました。「聞いてもよろしいかしら？」

「何を？だってあなたは乗馬ができないのですから。ああ、これから何が起こることやら！そしてどんな気まぐれであなたは突然こんなことを思いついたのでしょうか？」

「まあ、あなたには関係ないことよ、私の獣さん。馬に乗りたいときは、ピョートル・ヴァシーリエヴィチにお願いするわ。

(私の父はピョートル・ヴァシーリエヴィチという名前でした。私は、まるで父はいつでもジナイーダに尽くす準備ができていたのだとでもいう自信があるかのように、彼女がすらすらと父の名前を口にすることに驚いたのです。)

「なんてこった」ベロヴゾーロフが言い返しました。「あなたはあいつと馬を乗り回したいのですか？」

「あの方だろうと他の方だろうと、あなたにはどうでもいいことよ。あなたとだけは一緒に行かないけれど。」

「私とは行かない」とベロヴゾーロフが繰り返して言いました。「あなたの自由ですが、仕方ありません。あなたに馬を提供しますよ。」

「でもね、いいこと？牛みたいなのは嫌ですからね。あらかじめお伝えしておきますけど、私はギャロップで飛ばしたいのよ。」

「ギャロップだろうと、構いませんよ... 一体誰と行くんです？マレーフスキイとでしょうか？」

「あら、マレーフスキイさんと行ってはいけないのかしら、軍人さん。でも、安心なさって。」ジナイーダは言い添えました。

「ですから、そう目をぎらつかせないで？貴方とだって行くつもりよ。もうマレーフスキイさんなんて、嫌なのよ！」ジナイーダはそう言って、ふいと頭を振りました。

「そう言って私を慰めようというんですね。」ベロヴゾーロフはつぶやきました。

ジナイーダは目を細めました。

「こんなことが慰めになりますの？まあ、まあ、まあ... 軍人さんったら！」他にかかる言葉が見つからないといった様子で、ようやくジナイーダは言いました。「それで貴方は？ムッシュ＝ヴォルデマール。私たちと一緒にいかがかしら？」

「私は苦手なんです... 大勢でいるのは...」と、視線を上げずに私はつぶやきました。

「一対一の方がお好きなのよね？それならいいの。好きにしてよろしくてよ。」深くため息をついて、ジナイーダは言いました。

「さあ、行ってください、ベロヴゾーロフさん。全力を尽くしてくださいね。私、明日までに馬が必要なんですもの。」

「とんでもない、お金はどうするの！」

と、公爵夫人が話に割って入りました。

ジナイーダは眉間にしわを寄せました。

「お母さまにはお願いしていないわ。ベロヴゾーロフさんは私を信用してお金を出してくださるもの。」

「信用、信用。。。」と公爵夫人は言いました。そして突然、大声で叫んだのです。

「ドウニャーシカ！」

「お母さま、あなたに呼び鈴を差し上げましたわよね」と公爵令嬢が言いました。

「ドウニャーシカ！」と老公爵夫人が繰り返して言いました。

ベロヴゾーフは暇乞いをしました。私はベロヴゾーフと一緒に退散しました。ジナイーダが私を引き留めることはありませんでした。

#### 第 14 章

翌朝私は早起きをして、棒を一本切り取ると、クルージュスキイ門の向こうへと出かけました。自分の悲しみを紛らわせるつもりで出かけたのでしょう。素晴らしい天気、陽の光は明るく輝いていましたが、暑過ぎるほどではありませんでした。朗らかで爽やかな風が地上を吹き抜けていました。あらゆるものをそよがせていながら、不安を呼びおこすような風ではなく、程よく風音を立てて戯れているようでした。私は長いこと山や森の中を歩き回りました。自分のことを幸せ者だと感じられなかったので、憂鬱な気持ちに浸るつもりで家を出たのですが、青春、素晴らしい天気、澄み切った空気、早歩きによる気晴らし、そして茂った草の上に一人身を横たえたときの安らぎが私を捉えました。あの忘れがたい一言ひと言、あのキスの思い出が、私の胸をまたもや強く締めつけました。ジナイーダが私の覚悟やヒロイズムを認め正当に評価しないことなど、やはりできないのだと思うと、私にはそれが心地よく感じたのです...「ジナイーダにとっては、僕より他の奴らの方がいいんだろうな。」と私は思いました。「でも、いいさ！他の奴らは、やりませ、と口で言うだけだけど、僕はやったんだから！おまけに、僕はジナイーダのためならそれ以上のことだってできるんだ！...」

自分の中でイメージが掻き立てられました。

自分が敵の手からジナイーダを救い出したり、自分が血だらけになってジナイーダを牢獄から解放したり、ジナイーダの足元で死んだりする様を私は妄想し始めました。私は我が家の客間にかかっていた絵を思い出しました。マレク・アデルがマティルダを奪う光景が描かれた絵です。するとその時、大きなごてごてした色のキツツキが現れて細い白樺の幹をせわしなく上り、まるでコントラバスの後ろにいる音楽家のように、幹の後ろから不安そうに右や左を見ている姿に目を奪われました。

それから私は「雪は白くない」を歌い始め、その当時有名だった「そよ風が吹く間君を待つ」というロマンスへと歌を変えました。それから、ホミャコフの悲劇から、星々に向けたイェルマークの台詞を大声で読み始めました。私は情感のこもった形で詩を作ろうとし、その詩の最後に来るべき一行さえも思いついたのです。「おお、ジナイーダよ！ジナイーダよ！」でもその後は何も思いつきませんでした。

そうこうするうちに、食事の時間になりました。私は谷を降りました。細い砂の小道が谷をうねり、町へと通じているのです。私はこの小道を歩いて行きました...馬の蹄の鈍いコツコツとした音が、私の背後から聞こえてきました。私は振り返ると、思わず立ち止まり、帽子を脱ぎました。私の見たものは、私の父とジナイーダだったのです。2人は並んで馬を走らせていました。父はジナイーダの方へ全身を傾け、手で馬の首に掴まり、何か話しかけています。父は微笑んでいました。ジナイーダは、キッと目を伏せ、唇を噛みしめたまま、黙って父の話に耳を傾けているのでした。私には最初、この2人しか見えなかったのですが、ほんの数秒後、谷間の曲がり

角から、泡を吹いた黒馬に乗り、ペリース付きの軽騎兵の軍服を着たベロヴゾーフが現れました。駿馬は首を振り、鼻息をたて、踊るように飛び跳ねており、一方で騎乗者は手綱を引いたり、馬の横腹に拍車を当てたりしていました。

私は馬をやり過ぎました。父が手綱を引き、ジナイーダから離れると、ジナイーダはゆっくりと視線を父に向け、二人一緒にギャロップで飛ばしていきました。ベロヴゾーフはサーベルをがちゃがちゃいわせながらそのすぐ後を追いかけていきました。「ベロヴゾーフはザリガニみたいに真っ赤になっていた」と私は思いました。

「かたやジナイーダは・・・どうしてあんなに青ざめていたのだろうか？朝の間ずっと馬の背に乗って駆け回っていたのに青ざめているなんて。」

私は歩みを早め、食事の前に家に到着しました。父は既に着替え、すっかり身体を洗ってきれいになった状態で母の肘掛椅子のそばに座っており、落ち着いたよく通る声で母に風刺コラム「Journal des Debats」を読み聞かせていましたが、母は気もそぞろにそれを聞いており、私を目に留めると私が一日中どこにいたのかと尋ねました。そして私がどこで誰といるのか分からない状態なのは気に入らないと言い添えました。「ええ、私は一人で散歩していたのです」と私は答えたかったのですが、父を見た途端になぜか黙りこくってしまいました。

## 第 15 章

それから 5, 6 日の間、私はほとんどジナイーダに会いませんでした。彼女は具合が悪いううわさでしたが、それでもいつも離

れに来る取り巻きたちは代わるがわるやってきたのでした。感激するチャンスがなくなるとすぐに退屈してふさぎ込むマイダーノフを除いては。ベロヴゾーフはふさぎ込んで部屋の隅に座り、ずっと服のボタンをしっかりと締め、赤面していました。マレーフスキー伯爵のやせこけた顔には、次第にどこか敵意のある笑みが漂うようになりました。彼は本当にジナイーダから愛想をつかされてしまい、とりわけ熱心に老公爵夫人に取り入り、老公爵夫人とともに借り物の四輪馬車で県知事のところに通っていました。

しかし、このお出かけは失敗に終わったばかりか、マレーフスキーにとって嫌なことまで起こってしまいました。というのも、どこかの鉄道局の士官たちとマレーフスキーとの間に起こったある騒動を蒸し返されてしまったのです。そのため、マレーフスキーは、あの頃自分はまだ未熟者でしたので、釈明せざるを得なくなってしまいました。ルーシンは 1 日に 2 度ほどやってきましたが、長居することはありませんでした。この間の言い合い以降、私はルーシンのことが少し怖かったのですが、同時に彼に対して心から惹かれてもいたのです。ある日ルーシンが私とネスクーシヌイ公園へ散歩に出かけたときのこと、ルーシンはとても親切で愛想がよく、私に様々な草花の名前や特徴を教えてくれていたのですが、不意に自分の額をぴしゃりと叩くと、いわゆる場違いなほどの大声を發して、こう言いました。「それにしても、私は馬鹿だな。あの人のことを、男好きとしか思っていなかったんだから！自分を犠牲にすることに喜びを感じる人もいるってことだな。」

「何をおっしゃりたいのですか？」と私は尋ねました。

「あなたには何も話したくありません。」とたどたどしくルーシンが答えました。

ジナイーダは私を避けていました。私が現れると一私はそれに気づかずにはいられなかったのですが—ジナイーダは不快感を抱いていたのです。ジナイーダは無意識のうちに私から顔をそむけるようになりつつありました。無意識のうちに。このことが私を辛く、苦しくさせていたのです。でもなすすべがありませんでした。私はジナイーダの目に留まらないようにし、ただ遠くから彼女を見守っていたのですが、いつもうまく行くとは限りませんでした。ジナイーダには以前と同様、どこか理解しがたい点がありました。顔つきが変わり、彼女の身も心も別のものになってしまったのです。とくに私を驚かせたのは、ある暖かく静かな夕べに彼女の身に起こった変化でした。私はニワトコの大きく茂った木立の下にある低いベンチに座っていました。私はこの場所が好きでした。そこからはジナイーダの部屋の窓が見えたのです。

頭上では、黒々とした茂みの中で、一羽の小鳥が忙しくくるくると向きを変えていました。灰色の猫は、背中を伸ばすと、用心深く庭へ忍び込みました。そして、今年に入って初めて見かけたコガネムシが数匹、もう明るさはありませんが、未だ薄暗いままの空中を重々しくぶんぶんと飛んでいました。私は腰掛けて窓を眺めていました。窓が開きはしないかと待ちわびていたのです。すると、本当にその窓が開き、中からジナイーダが現れました。ジナイーダは白いドレスを着ていましたが、彼女自身もまた、顔に肩、そして腕まで真っ白なほどでした。ジナイーダは長いこと身じろぎ

もせずに立ち尽くし、ひそめた眉の下から真っ直ぐ前を見据えています。あのような眼差しをするジナイーダを、私は初めて見ました。それからジナイーダは両手をぎゅっと強く握りしめると、その拳を口元や額へと運びました。すると突然、握っていた指を広げ、両耳にかかる髪を払いのけて、左右に髪を振り切ったかとおもうと、何か決心がついたかのように頭を上から下へと頷くそぶりをし、窓をばたんと閉めてしまいました。

3日ほどが経ち、ジナイーダは私と庭で出くわしました。私は脇へ避けようとしたのですがジナイーダは私を止めました。

「手を出して」とジナイーダは以前のような優しい声で私に言いました。「私たち、長いことおしゃべりをしなかったわね」

私はジナイーダを見つめました。ジナイーダの目は静かに輝きを放ち、彼女が微笑む様子はまるで霞がかかったようなものでした。

「まだ具合が悪いのではありませんか？」と私はジナイーダに尋ねました。

「いいえ、もうすっかり良くなったわ」とジナイーダは答え、1輪の小さな赤いバラを摘みました。「少し疲れたけれど、この疲れもじきに取れるわ」

「ということは、また元通りになるということですか？」と私は尋ねました。

ジナイーダがバラを顔に近づけると、まるでその明るい花びらの色合いが頬に移ったように見えました。

「私って変わってしまったかしら。」とジナイーダは私に尋ねました。

「ええ、変わってしまいました」と私は小声で答えました。

「私、あなたに冷たくしていたの。分かっているわ。」とジナイーダが話し始めまし

た。「でもね、あなたはそんなことを気にしなくて良かったの。だって私には他のやり方ができなかったのだから。ええと、なんと言ったらいいかしら！」

「あなたは私に好かれたくない、そうでしょう！」私は不機嫌に、思わず気持ちを高ぶらせて叫びました。

「いいえ、私を愛して。でも前とは違った方法だよ。」

「どういうことですか？」

「お友達になりましょう、そういうことよ！」ジナイーダは私にバラの香りをかかせました。「聞いてちょうだい。私はあなたよりもずいぶん年上だから、あなたの叔母さんだったとしてもあり得る話だったのよ、本当よ。まあ、叔母さんではなくて、お姉さんね。それであなたは・・・」

「貴女にとって、僕は子どもというわけですね。」と、私は話を遮りました。

「まあそうね。子どもだけれど、可愛くていい子で頭がよくって、私は大好きよ。ねえ、いいこと？今日この日から、貴方を私のお付きの人にしてあげるわ。お付きの人というのはご主人様の側を離れてはいけないの、それを忘れないで。さあ、これが新しい階級章よ。」ジナイーダは私の上着のボタン穴にバラを差し込みながら、こう言い添えました。「貴方への寵愛の証よ。」

「僕は以前、貴女からもっと違ったご寵愛を受けていましたが。」私はつぶやきました。

「何ですって！」ジナイーダはそう言うのと、脇から私をのぞき込みました。「何て記憶力がいいのかしら！仕方ないわね！今だってそうしてあげられるわ...」

そうして、ジナイーダは私の方は身をかがめると、私の額に清らかで穏やかなキスをしてくれたのです。

私はジナイーダを眺めることしかできませんでしたが、ジナイーダはそっぽを向き、「ついていらっしやい、私のお付きの方。」と言うと、離れへと歩き出しました。私はジナイーダの後を追いましたが、何一つ理解できませんでした。「あの優しく分別のある女性が、本当に僕の知るジナイーダなのだろうか？」と、私は考えました。ジナイーダの歩き方までもが、心なしか以前より静かになっているような気がしました。ジナイーダのその姿も、一層堂々としていてすらりとして見えました。だからこそ、ああ！私の内なる恋心は、どれほどの新たな威力でもって燃えあがったことでしょう！

## 16 章

食事の後、再び取り巻きたちが離れに集まり、ジナイーダもその場に出てきました。私が初めてここを訪れたあの忘れがたい夜と同じく、全員が1人も欠けることなくそろっており、ニルマーツキーまでもがやって来ました。マイダーノフは、今回誰よりも先に到着して、新しく作った詩を持参していました。またもや罰金ゲームが始まりましたが、以前のような変な悪ふざけも悪戯も大騒ぎもなく、ジプシー的などころは消え去っていました。ジナイーダによって、私たちの集まりの雰囲気はこれまでとは違ったものになったのです。私はお付きの者の権利でもって、ジナイーダのすぐ側に座っていました。ちなみに、ジナイーダが、罰を受ける人が自分の見た夢の内容を話しましょうと提案したのですが、それがうまく行きませんでした。夢の内容が面白くなかったり（ベロヴゾーロフが見た夢

は、自分の馬に餌としてフナをあげたら、馬の頭が木になっていたというものでした。) 、不自然に作られたような話だったからです。マイダーノフが披露した話は、一編の中編小説のようでした。その夢には、お墓の納骨堂、豎琴を手にした天使たち、言葉を話せる花々、果ての方から聞こえてくる物音といったものが盛り込まれていました。ジナイーダは、マイダーノフに最後まで話をさせずに、こう言いました。

「もう作り話をする流れになっているのなら」とジナイーダは言いました。「今度は一人ひとり、自分で考えたお話を披露することにしましょう。」

ベロヴゾーロフが最初に話す人になりました。

若き軽騎兵は慌てました。

「私は何も思いつけないのです！」と彼は叫びました。

「なんてつまらない人！」と後に続いてジナイーダが言いました。「ねえ、例えばあなたに奥様がいたらと想像してみて。それからどんなふうにあなたの奥様と過ごすかを話してくださらない？あなただったらその奥様を閉じ込めるかしら？」

「閉じ込めますね」

「そしてあなたも奥様と一緒に閉じこめるの？」

「きっと一緒に閉じこもりますね。」

「すばらしいわ。ねえ、彼女がそんな生活に飽きて、あなたを見捨てたらどうする？」

「私は彼女を殺します。」

「もし彼女が逃げ出したら？」

「彼女を追いかけて、なんとしても殺しますよ。」

「そう。ねえ、もし私があなたの妻だったら、そうなったときに私を殺す？」

ベロヴゾーロフは黙りました。

「私だったら自殺しますね。」

ジナイーダは笑い出しました。

「あなたの話は長くないようね。」

ジナイーダのくじが 2 番目に引かれました。ジナイーダは天井に視線を上げて、考え込んでいました。

「では、よろしくて？」ようやくジナイーダが話し始めました。「私が考えた話なの... 豪華絢爛な宮殿を思い浮かべてちょうだい。夏の夜に、素晴らしい舞踏会が開かれているの。この舞踏会の主催者は若い女王様よ。至るところに、黄金や大理石、水晶、シルク、灯火、ダイヤモンド、お花にお香、贅沢なあらゆる気まぐれが散りばめられているの。」

「貴女は贅沢がお好きなのですか？」ルーシンが話を遮りました。

「贅沢なものって美しいでしょう。」とジナイーダは言い返しました。「私は美しいものなら何でも好きよ。」

「高尚なものよりもですか？」とルーシンは尋ねました。

「それって、何か意地悪ね。わからないわ。話の邪魔をしないでちょうだい。そういうわけで、盛大な舞踏会なのよ。招かれた人は大勢いて、皆若くて眉目秀麗で、凛々しい方たちばかり。そして、皆夢中で女王様に恋をしているの。」

「招かれた人たちの中に女性はいないんですか？」とマレーフスキイが尋ねました。

「いないわ。でも、ちょっと待って、やはりいるわ。」

「皆、不器量なのですか？」

「皆、素晴らしく美しいわ。それでも男性たちは皆、女王様に恋をしてるのよ。女王様は背が高くて、すらりとした体つきで、

黒髪の上に黄金の小さな冠をのせてるの。」

私はジナイダを見ました。そしてその瞬間、彼女は我々よりも崇高な存在で、その白い額と不動の眉から輝かしい知性と影響力が漂っているように見えました。それは私が「君こそがこの女王だ！」と思うほどのものでした。

「皆が女王の周りに群がって」とジナイダは話を続けました。「おべっかだらけの話を女王の前でこぞって披露しているの」

「ところで女王はお世辞が好きなのですか？」とルーシンが尋ねました。

「もううんざり！何を言っても邪魔されるのだから・・・お世辞が好きではない人なんていると思いませんか？」

「もう一つ、最後の質問ですが」とマレーフスキーが言いました。「女王には夫がいるのですか？」

「こんなこと考えもしなかったわ。いないわ、どうして夫が必要なの？」

「そうですね。」とマレーフスキーは続けて言いました。「どうして夫が必要なんでしょうね？」

「シランス」とフランス語で話すのが下手なマイダーノフが叫びました。

「メルシー」とジナイダがマイダーノフに言いました。「そうして、女王はこんな話を聞いたり、音楽を聴いたりしているのだけれど、客人は一人も見ないの。6つの窓が上から下まで、天井から床まで開け放たれているのだけれど、その向こうには夜空に大きな星々が広がっていて、暗い庭には大きな木々が見えるの。」

女王様はその庭園を見つめているのよ。そこには、木々の近くに噴水があってね、噴水が暗闇に白っぽく浮かびあがって、長く長く伸びていて、まるで亡霊のような

の。女王様は、人々の声や音楽の向こうに静かな水音を聴いているのね。女王様は眺めながら、こう考えているの。皆さん、あなた方は皆、高貴なお生まれで、知的で、お金持ちでいらっしゃる。私を取り囲み、私の一言一句を重んじ、私の足元で死ぬ覚悟がおありです。あなた方の全ては私が握っているの...。でも、あそこの噴水のそばには、あの水音の近くには、私の愛するあの方が、私の全てを握っているあの方が佇んでいて、私を待っている。あの方は、豪華な衣装も宝石も身につけていないし、あの方のことを知っている人は誰もいないわ。でも、あの方は私を待っていてくださり、私がやって来ると固く信じている。そうよ、私は行くわ。あの方の元へ行き、ともにありたい。庭園の暗闇へ、木の葉のざわめきのもとへ、噴水の水音のもとへと姿を消してしまいたいと私が願ったら最後、どんな力を持ってしても私を止めることなど出来ないのですから...。」

ジナイダは口をつぐみました。

「これはあなたの創作ですか？」と意地悪そうにマレーフスキーが尋ねました。

ジナイダは彼を見もしませんでした。

「では皆さん、私たちだったら何をしますかね。」と突然ルーシンが話し始めました。「もし我々があの客人たちの一員で、噴水のほとりにいる幸せ者のことを知ったらどうしますか？」

「ちょっと待ってくださいな」とジナイダが話を遮りました。「あなた方だったらそれぞれ何をするかは私からお伝えしますわ。ベロヴゾーロフさん、あなただったら彼を決闘に呼び出すでしょうね。マイダーノフさん、あなただったら彼に風刺詩を書いてよこすでしょう。いや、でもあなたは風刺詩を書けないわね。あなただったら彼

に向けてバルビエのような長い弱強格を作って、「テレグラフ」に載せる作品の一つにするでしょう。ニルマーツキーさん、あなただったら彼からお金を借りる、いえ、あなただったら利息目当てで彼にお金を貸し付けるでしょう。ドクトル、あなただったら・・・」ジナイーダの話が止まりました。「あなただったら何をするかは分からないわ。」

「宮廷侍医の肩書を持つものとして」とルーシンは答えました。「私だったら女王に、客人どころではない時には舞踏会を開催せぬよう忠告いたしますよ。」

「確かに、貴方のおっしゃるとおりかもしれないわ。ところで伯爵、貴方は？」

「私？」不気味な笑みを浮かべて、マレーフスキイが言いました...

「貴方なら、毒を盛ったお菓子を相手にふるまうんじゃないわ？」

マレーフスキイは若干顔を引きつらせ、一瞬ユダヤ人のような表情を浮かべましたが、すぐに大笑いを始めました。

「貴方はどうかしら、ヴォルデマール...」と、ジナイーダは言いかけてましたが、こう続けました。「でも、もうたくさんだわ。違う遊びにしましょう。」

「ムッシュー・ヴォルデマールは、女王様のお付きの者として、女王様が庭園へ駆け出したら、ドレスのトレーンを持って差し上げるんでしょうね。」と、マレーフスキイは毒を含んだ言い方をしました。

私はカッとりましたが、ジナイーダは私の肩にさっと手を置き、少し腰を上げると、微かに震える声でこう言いました。

「伯爵様、私は貴方に無礼なことをする権利など差し上げた覚えはございません。でするので、どうぞお引き取りください。」

ジナイーダはマレーフスキイにドアを指し示しました。

「お嬢様、どうかご慈悲を」とマレーフスキイはもごもごと言い、すっかり青ざめてしまいました。

「お嬢様の言う通りだ」とベロヴゾーロフは叫び、彼も立ち上がりました。

「私は、誓って申し上げますが、そんなつもりではなかったのです。」マレーフスキイは続けて言います。「そんなつもりで発言をしたわけではございません。私にはあなたを侮辱する考えは無かったのです。どうかお許してください」

ジナイーダはマレーフスキイを冷たい視線で舐めるように見て、冷たく薄笑いをしました。

「だったらいいわ、ここにいてくださっても」とジナイーダは冷淡な態度で腕を動かしながら言いました。「私とムッシュ・ヴォルデマールはつまらないことで腹を立ててしまった。好きなだけ不満を言えばいいわ。」

「お許してください」ともう一度マレーフスキイが繰り返しましたが、一方私はジナイーダの仕草を思い出しながらもう一度、本当の女王であっても、大なる自尊心を発揮して厚かましい男にドアを指し示すことなどできなかったらと思うました。

この小さな一幕の後では、罰金ゲームも長くは続きませんでした。皆がいささか決まり悪くなってしまったのは、この一幕があったからというよりは、それとは別の、あまりはっきりしませんが、それでいて重苦しい感情によるものだったのです。誰もそのことを言おうとしませんでした。しかし、皆が皆、己が内にも隣にいる人の心の内にも、こうした感情が潜んでいると感じていたでしょう。マイダーノフが自作の詩



を朗読すると、マレーフスキイはその詩を過剰なほど熱心に褒めちぎりました。「今度は、何とかしていい人に見られたがっているんですよ。」とルーシンが私に囁きました。間もなく、私たちは解散しました。ジナイーダは突然物思いに沈んでしまうし、公爵夫人は頭痛がすると言ってよこすし、ニルマーツキイは持病のリウマチが痛むと言っていました…。

私は長いこと寝付けませんでした。ジナイーダの話聞いて、気が動転していたのです。

「まさか、あの話の中にヒントがあるのかな？」私は自問しました。「だとすると、誰のことを、何のことをジナイーダは仄めかしているんだろう？」

そしてもし本当にほのめかしていたものがあつたら、僕はどう心づもりをするべきだろうか？いやいや、ありえない」と私は、腕に付けている熱い片方の頬をもう片方と入れ替えながらつぶやきました。けれども私はジナイーダが話している間の彼女の表情を思い出しつつありました・・・私はネスクーシヌイ公園でルーシンが叫び出したこと、ジナイーダの私に対する態度が突然変わったことを思い出し、わけが分からなくなりました。「あいつはどんな奴なんだ？」この 2 語が私の目の前の闇に浮かびました。まるで低い不吉な雲が私の上空に広がっているようでした。そして私はその雲の圧力を感じ、雲が今にも激しい風を起こすのではないかと予感していました。

ここ最近の私は、多くのことに慣れを感じ、ザセーキン家では多くのことを見てきました。あの家の人たちの下品さ、あぶら蝋燭の燃えさし、欠けてしまったナイフとフォーク、陰気なヴォニファーチイ、ぼろぼろの服を着た小間使いたち、公爵夫人自

身の立ち居振る舞い。こうしたあらゆる奇妙な暮らしぶりに対し、私はもはや驚かなくなっていたのです... ですが、今ジナイーダの中におぼろげに感じられる何かに対し、私は慣れることなどできませんでした... 「火遊び女」一ある日、母がジナイーダのことをそう言ったのです。「火遊び女」一そのような女性が、私の崇拜の対象であり、私の女神なのです！母のその言い方に、私の胸は焼けるような痛みを感じ、逃れるように私は枕に顔をうずめました。私は憤りを感じましたが、それと同時に、例の噴水のかたわらに佇む幸せ者になれるのなら、私は何にでも同意するし、何でも差し出せると思ったのです...!

全身の血が沸き立ち、興奮してきました。

「庭園... 噴水...」私はふと考えました。

「庭へ出てみようかな。」

私はさっと服を身にまとい、家からこっそり抜け出しました。夜は暗く、木々がかすかに音を立てていました。空から静かにひんやりした風が吹いてきて、垣根からはディルの香りが漂ってきました。私は並木道を全てくぐりました。軽快な足音を聞いて私は心を乱したり、励まされたりしました。私は立ち止まっては待ち、私の心臓の音が大きく早く打つのを聞きました。とうとう私は垣根に近づき、細長い木に寄りかかりました。突然、あるいは私にそう思われただけでしょうか？私から数歩離れたところを女性の影が通り過ぎました。私は緊張して視線を闇に向け、息を殺しました。これは何だろう？聞こえたのは足音だったのか、また私の心臓が脈打ったのか？「ここにいるのは誰ですか？」私はどうにかはつきりと、しかしぎこちなく言いました。これは一体何なんだ？押し殺した笑い声なのか、葉がこすれる音なのか・・・あるい

は耳元でため息が聞こえるのか？私は怖くなりました。「ここにいるのは誰ですか？」とさらに小さな声で私は繰り返しました。

一瞬、空気がさっと流れました。空に真っ赤な光が一筋煌めいたのです。それは、流れ星でした。「ジナイーダなの？」と、問いかけたかった私ですが、その声は唇のところで消えてしまいました。すると、真夜中にはよくあることですが、不意にあたりが深い静寂に包まれたのです...木々の中にいたキリギリスまでもが鳴くのを止め、ただ窓ガラスがどこかでかたかた音を立てただけでした。

私は立ち止まると、自分の部屋の冷え切った寢床に戻りました。私は奇妙な神経の高ぶりを感じていました。まるでそれは、デートに終わって一人になり、他人が幸せそうにしている脇を通り過ぎたときのような神経の高ぶりでした。

## 17 章

翌日、私がジナイーダを見かけたのは、ほんのチラッとだけでした。ジナイーダは、公爵夫人とどこかへ辻馬車で出かける場所でした。そのかわり、私はルーシンに会いました。もっとも、ルーシンは私にろくに挨拶もしなかったのですが。それと、マレーフスキイにも会いました。若き伯爵は、歯を剥き出しにしてにっこりと笑い、親しげに話しかけてきました。離れを訪れる男性たちの中で、マレーフスキイだけが私の家に上手く取り入り、母のお気に入りになっていたのです。父はマレーフスキイが気に入らず、マレーフスキイへの接し方は慇懃無礼なほどでした。

「やあ、お付きの君！」マレーフスキイが

話しかけてきました。「会えてとても嬉しいよ。貴方の美しい女王様は何をしておいでです？」

マレーフスキイの清々しく端正な顔立ちが、この瞬間、私にはとても不快でした。マレーフスキイが、あまりにも蔑むようなふざけた目つきで私を見るので、私は一切口をききませんでした。

「貴方はまだ怒ってるんですか？」と、マレーフスキイが続けます。「無駄なことだ。第一、貴方をお付きの者と呼び出したのは僕じゃないし、それに、お付きの者つてのは総じて女王様のお側にいるものでしょう。」

私に言わせれば、あなたは職務怠慢といえますな。」

「何ですって？」

「お付きの者はご主人様のそばを片時も離れずにいなければならないのです。そしてご主人様が何をしているのかを全て把握し、ご主人様を見守っていなければならないのです。」と彼は小声で言い添えました。「昼夜問わず。」

「何をおっしゃりたいのですか？」

「何を言いたいのかって？はっきりと申し上げているつもりなんですけどね。昼も、夜も。昼間はまだどうとでもなりますよ。昼間は明るくて人通りが多いですからね。ところが夜中はまさに災難が待ち構えているものなのです。毎晩寝ずの番をすること、全力で見張ることですよ。そう忠告しておきます。忘れないでくださいね、庭で、夜に、噴水のほitoriですよ。これこそが見張るべき場所なのです。あなたは私にお礼を言うことになるでしょうね。」

マレーフスキイは笑い出し、私に背を向けました。マレーフスキイは、恐らく、先ほどの話に特別な意味を込めるつもりなど

なかったのでしょうか。何しろマレーフスキイは、大変な大嘘つきと評判で、仮面舞踏会ではその持ち前の能力で人々を騙していることで有名でした。それも、マレーフスキイという人間全体に染み込んでいる、ほとんど無意識による嘘つき癖のなせる技なのです...マレーフスキイは、私をからかいたかっただけかもしれませんが、彼の一言一句は毒となり、血管にのって私の隅々まで駆け巡りました。私は頭に血が昇って真っ赤になりました。「そうか！そういうことか！」私はつぶやきました。「いいぞ！つまり、昨日の僕の予感はずしだったんだ。僕が庭に引き寄せられたのは無駄なことではなかったんだ！でも、そんなことであるのだろうか！」私は大声をあげ、握りこぶしで自分の胸を叩きました。しかし、本当のところ、何がそうそう起こらないことなのかと問われると、私には答えられません。「マレーフスキイがみずから、庭に現れるということだろうか？」と、私は思いました。（あいつは、恐らく、口を滑らせたんだ。あいつが、あの厚かましさを発揮したんだろうな。）それとも誰か別のやつが来るのか？（うちの垣根はとても低いから、垣根を乗り越えて侵入することなんてわけないし。）だけど、僕に捕まったらただでは済まないぞ！僕と鉢合わせしないようにするがいいさ！

僕は全世界と裏切り者のジナイーダに（私は文字通りジナイーダを裏切り者と呼びました）、復讐ができるということを証明してやるのだ！」

私は自分の部屋へ戻り、勉強机から最近買ったイギリス製のナイフを取り出すと、その鋭い刃に触れ、眉をひそめ、集中して冷静に覚悟を決め、まるでこんなことは驚

くほどのことでも、初めてのことで無いらしい調子でポケットにナイフを突っ込みました。私の心はどんどん悪意に満ち、人間らしい感情はなくなりました。私は真夜中まで眉をぴくりとも動かさず、唇を結び、ポケットの中で温まったナイフを握りしめ、何か恐ろしいことのために気持ちを整えながらひっきりなしに行ったり来たりしました。この新しく、経験したことのない感情により、ジナイーダのことをほとんど考えていなかったほどに私という存在が蝕まれ、陽気にさえなつたのでした。全てがぼんやりと見ええました。若いジプシーのアレーコは「そこの二枚目、どこへ行くんだい？まあ横になりねえ。」と言ひ、それから「お前さん、体中血だらけじゃないか？一体何をしたんで？」「何もしていない！」異様な笑みを浮かべて私はこの台詞を繰り返しました。「何もしていない！」

父は留守でした。しかし母が（母は少し前から殆どしょっちゅう、内に秘めた苛立ちを募らせていたのですが）、私のただならぬ様子に気づいて、夕食の席で「何をむくれてるの？」と私に言ってきました。私は、母に答える代わりに、見下すような薄笑いを浮かべて、「こんなことを親が知ったらなあ！」と考えました。時計が 11 時を打ちました。私は自分の部屋へ引き上げましたが、着替えをせずに、真夜中になるのを待っていると、いよいよ時計が 12 時を打ったのです。「時間だ！」歯の間から漏れ出した声で囁くと、上着のボタンを 1 番上まで掛け、両腕の袖まで捲り上げると、私は庭へ出ました。

私は、あらかじめ見張る場所を決めていました。その場所は庭のはずれで、そこはわが家とザセーキン家の領地の境界となっている垣根が、両家共用の塀へとぶつかる場

所で、もみの木が 1 本立っていました。低く生い茂ったもみの木の枝の下に立っていれば、闇夜が許す限りは、この辺りで起こることがはっきり見えたのです。そこには、私が常日頃神秘的に感じていた小道がうねっていました。なぜなら、その小道は蛇のごとく垣根の下を這うように通じていて、その垣根の所には垣根を乗り越えたような足跡がありました。そしてその小道は、全てアカシアの木でできている円いあずま屋へと伸びているのです。

私はもみの木までたどり着くと、その幹にもたれかかって見張りを始めました。夜は前日と同じく静まり返っていました。しかし空に浮かぶ雨雲が前日より少なかったので、茂みの輪郭や背の高い花々さえもはっきりと見えるのでした。最初、この待ち伏せは恐ろしくなるほどにうんざりするものでした。私はあらゆる事態に備えてただただ考えをめぐらせました。どう行動すべきだろうか？「どこへ行くんだ？止まれ！白状しないと死ぬことになるぞ！」とどなってやろうか？あるいは警告だけしてやろうか？あらゆる物音や木々が立てる音が、私にとっては重要で異常な物音に思われるのでした。私は心の準備をして、前かがみになりました。しかし 30 分、1 時間が経つと私の血気は収まり、冷え切っていました。僕はただむなしく見張りをしていただけだ、僕は何ともぶざまだ、マレーフスキーは僕をからかったんだ、といった自意識が私の心を蝕み始めました。私は見張りを止め、庭をぐるりと回りました。当てつけのように、わずかなざわめきも聞こえず、全てが眠りについていました。我が家の犬でさえ、木戸のそばで丸まって眠っていました。私は温室の残骸によじ登り、目の前に広がる野原を見て、ここでジナイ

ーダと会ったことを思い出し、物思いにふけていました。

私は身震いしました。

ドアがキッと開く音がして、それから枝がパキッと折れる音が聞こえた気がしたのです。私はふた跳びで瓦礫から飛び降りると、その場から動けなくなりました。足早で軽やかでありながら用心深い足音が、静かに庭に響きました。足音は私の方へ近づいてきます。「来たぞ...とうとうやつが来たぞ！」という思いが私の心の中を駆け巡りました。私は引きつったようにナイフをポケットから引き抜くと、発作的にナイフを開きました。何やら赤い火花のようなものが私の眼の中で舞い、恐怖と憎悪で髪がかすかに動きました...足音は私の方へ真っ直ぐ向かってきます。私は身をかがめた後、足音に向かって身を乗り出しました...男が現れました...何たること！それは私の父だったので！

全身をすっぽりと黒いマントで身を包み、帽子を目深に被っていても、私にはすぐに父だと分かりました。つま先立ちで、父は脇を通り過ぎて行きました。私は何かに隠れていたわけではないのですが、小さく身を縮めて、地面すれすれのところを這いつくばるようにしていたためか、父に気づかれませんでした。

嫉妬深く、殺人を犯すつもりだったオセローが、突然学童に変わってしまいました。私は最初、父がどこから来てどこへ消えていったのかさえ分からないほど、父が不意に現れたことに驚いていました。私が姿勢を正し、「何のために父は夜中に庭を歩いていたのだろう」と考えたのはそれからでした。そしてまた周りの全てが静まり返りました。恐怖のあまり私はナイフを草地に落としてしまいましたが、それを探そ

うとすらしませんでした。とても恥ずかしかったのです。私はたちまち正気に戻りました。

家に戻りつつも、私はニワトコの茂みの陰にあるベンチの近くまでくると、ジナイーダの寝室の窓を見上げました。いくらか反り返り気味の小さな窓ガラスが、夜空から降りそそぐ淡い光をあびて、ぼんやりと青白くなっていました。すると不意に、窓ガラスの色が変わり始めたのです...窓ガラス越しに、(私には見えましたが、はっきりと見えたのです)、そっと静かに白っぽい巻きカーテンが降ろされていき、窓枠のところまで降ろされると、そのまま動かなくなりました。

「あれは一体何なんだろう？」いつの間にか自分の部屋に舞い戻っていた私は、思わず声を出してつぶやきました。「夢か、偶然か、それとも...」そのとき突如として私の脳裏に浮かんだ憶測は、あまりに予想だにしない異様なものだったので、想像する気にすらなりませんでした。

## 18 章

私は頭に痛みを感じながら朝早く起きました。昨日の興奮は鎮まりました。興奮は、激しい困惑とこれまで経験したことの無い悲しみへと変わりました。まるで、私の中で何かが消えてしまったようでした。

「何をぼんやり見ているのですか？脳みそを半分抜かれたウサギのようですよ。」と、私に出くわしたルーシンが言いました。

朝食の時、私は父を盗み見たり母を盗み見たりしました。父はいつも通り冷静でした。母はいつも通りいらいらした気持ちを内に秘めていました。私は、時たまそうな

るように父が私に親しげに話しかけてくるのを期待しました...しかし父はいつも通りの冷たさと優しさを伴った調子で私をなでることさえしませんでした。「全てをジナイーダに話してしまおうか」と私は思いました。「もうどうでもいいのだから、僕とジナイーダの関係は終わりを迎えたのだから」

私はジナイーダのところへ行きましたが、何一つ言い出せないばかりか、思ったようにジナイーダとおしゃべりもできませんでした。公爵夫人のところには、軍人育成学校に通っている 12 歳くらいの息子が、休暇でペテルブルクから戻ってきていました。ジナイーダはすぐに弟を私に預けたのです。

「さあ」ジナイーダは言いました。「私の可愛いヴァロージャ（私のことをジナイーダがそんな風に呼んだのは初めてでした。）、お友達よ。この子もヴァロージャっていうの。どうか、可愛がってあげてくださいね。人見知りするけど、心優しい子なのよ。ネスクーシヌイ公園を案内して、お散歩に連れて行ってくださらないかしら。この子の面倒をみてほしいのよ。そうしてくださいませんか？貴方だって、とてもいい子だもの！」

ジナイーダが私の肩に優しく両手をかけたので、私はすっかり当惑してしまいました。この少年がやってきたことで、私までもが少年になってしまったのです。私は黙って少年を見つめていましたが、向こうもまた私の方を無言で見つめているのでした。

ジナイーダは大声で笑いだし、我々二人をくっつけました。

「子供たち、抱き合ってください！」

私たちは抱き合いました。

「あなたを庭へお連れしましょうか？」と私は少年に尋ねました。

「どうぞお願いします。」と彼は少年らしいかすれた声で答えました。

ジナイーダはまた笑い出しました。私は、ジナイーダの顔がこれまでなかったほど魅惑的な赤みを帯びていることに気付きました。私は少年と出かけました。公園には非常に年季の入ったブランコがありました。私は彼を細い板に座らせると、彼を揺らし始めました。彼は厚手のラシャに太い金モールのついた新しい制服を身に着け、動かずにブランコの紐をしっかりと握っていました。

「襟のボタンをはずしてはどうですか？」と私は少年に尋ねました。

「結構です。我々はこれに慣れておりますので。」と彼は答えて咳払いをしました。少年は姉のジナイーダに似ていました。特にその目がジナイーダを彷彿とさせました。

この子の面倒をみるのは楽しかったのですが、同時に疼くような悲しみが静かに心を苛むのでした。「ああ、これで、僕はまさしく子どもだ！」と私は思いました。「それなのに、昨日は…」私は前日にナイフを落とした場所を思い出し、ナイフを見つけ出しました。少年はナイフを貸してほしいとねだり、セリの太い茎を切り取ると、それを削って笛にして吹き始めました。オセロも吹いてみました。しかし夕方になって、庭の片隅にうずくまっていたところを、「何故そんなに悲しそうなもの」とジナイーダに聞かれたときに、この同じオセロがジナイーダの腕の中でどんなにか泣いたことでしょう。ジナイーダがびっくりするほどの勢いで涙がほとばしりました。

「どうなさったの？どうなさったの、ヴァ

ロージャ？」ジナイーダは繰り返し問いかけましたが、私が返事もしなければ泣き止みもしないのを見て、私の濡れた頬にキスをしようと思いました。ですが、私は顔をそむけ、咽び泣きながらこう囁きました。

「何もかも知っています。どうして僕を弄んだんですか？…何のために僕の愛が必要だったんですか？」

「私が悪かったわ、ヴァロージャ…」とジナイーダが言いました。

「ああ、私って本当に罪な女ね。」とジナイーダは言い添えてこぶしを握りしめました。「私ってどれほど悪どくて不可解で罪深いのかしら・・・でももう私はあなたをもてあそんだりしない、あなたを愛しているもの。理由は考えなくていいわ。ところで、あなたは何を知っているのかしら？」

私はジナイーダにどう答えられたのでしょうか？ジナイーダは私の前に立って私を見ていて、一方の私はジナイーダから見つめられるとたちまち頭から足まで身も心も彼女のものになってしまったのですから。

それから 15 分もすると、私はもう、少年やジナイーダと一緒に鬼ごっこをしていました。泣かずに笑っていたにも関わらず、笑うたびに腫れぼったいまぶたから涙がこぼれるのでした。私の首には、ネクタイの代わりにジナイーダのリボンが結んであり、ジナイーダの腰を上手く捕まえることができると、私は嬉しくて大きな声を上げていました。ジナイーダは私を思うがままに操っていたのでした。

## 19 章

もしも、私がああ失敗に終わった夜警の後の 1 週間のうちに起こったことを詳しく話す必要に迫られていたら、相当困り果て

ていたことでしょう。これは奇妙で熱にうかされていたような時間で、混沌とでも言うべきものでした。まさに相反する感情、意志、疑い、希望、喜びと苦しみといったものが渦のように回っていました。もしもたった 16 歳の少年が自分の心境について考えられるとすれば、私はそうすることを恐れており、その心境がどうであろうと、ありのままを自覚するのは恐ろしいことでした。私はただ一日を夜まで生き抜くことに追い立てられていました。その代わり夜は眠っていました。子どもらしくあまり考えないことで私は助かっていました。

自分が人から愛されているのかなど、私は知りたくもなかったですし、自分が人から愛されていないと自覚することも嫌でした。それゆえ、私は父を避けていました。しかし、ジナイダを避けることなど私にはできませんでした。ジナイダがいると、まるで炎に焼かれているかのようでした...私を焼き、溶かしゆくこの炎が、どういう炎なのかを知ろうともしなかったのは、こうして焼かれて溶けゆくことが甘美だと思ったからです。私は様々な印象に身を委ね、自分で自分をだまし、思い出からも顔をそむけ、これから先に起こりそうな出来事から眼をつむっていました...こうした苦悩は、恐らく、長くは続いたでしょう...雷のような一撃が、一度に全てを断ち切って、私を新たな軌道へと乗せたのです。

ある日私が思いがけず長くなってしまった散歩から帰ると、私は驚きのうちに、一人で食事を取ることになること、父が外出してしまったこと、母は調子が悪く、食事をとる気が起きず寝室に閉じこもっていることを知りました。召使たちの表情から、私はただならぬことが起きたのだと気づき

ました。彼らに根ほり葉ほり聞くことはできませんでしたが、私には親しくしていたビュッフエの従業員で、熱烈な詩の愛好家でギターの演奏家でもあるフィリップがいましたので、彼のところに向かいました。

フィリップから聞いた話によると、父と母の間に凄まじい揉め事が起こったようなのです。(女中部屋には、余すことなく全て聞こえていたのです。会話の多くはフランス語で交わされていたようですが、小間使いのマーシャが、5 年間パリ出身の裁縫師のところにいたので全て分かったのです。)母は、父の不貞や父が隣の令嬢と付き合っていることを非難しており、初めのうち父は弁解していたようでした。しかし、その後カッとなってしまった父が、今度は「何やら母の年齢のこと」で酷いことを言っらしく、それで母が泣き出してしまったらしいのです。さらに母は、老公爵夫人にあげてしまったという手形の話にも言及し、散々公爵夫人のことも公爵令嬢のことも悪く言い立てるものだから、父が母に脅し文句を叩きつけたそうです。

「ところで、全ての災いは」とフィリップは続けて言いました。「差出人不明の手紙がもとで起こったのです。それにしても誰が書いたのでしょうか。分かりません。それにしても、この元凶さえなければ、一連の出来事が明るみになることなどなかったのですが。」

「本当に何かがあったのかい？」とやっとのことで私は言葉を絞り出したのですが、そうこうしているうちにも私の手足は冷たくなり、私の胸の奥底では何かが震え始めていたのです。

フィリップは意味ありげに瞬きをしました。

「あったのです。こういうことは隠しては

おけないものです。あなたのお父様は今度ばかりは相当用心していますね。・・・例えば箱馬車を雇う必要があるということですし・・・どうやっても他人から噂されずに済むことはないのですから。」

私はフィリップを下がらせ、ベットへ倒れ込みました。号泣することも、絶望感に浸ることもありませんでした。こんなことが、いつ、どんな風に起こったのか自問することもありませんでした。どうしてもっと前に、もっと昔から察しがつかなかったのかと不思議に思うこともなかったのです。私は、父に不満をぶつけることさえしませんでした。私の知ったことというのは私の力の及ばない出来事だった、という突然の天啓に、私は打ちのめされてしまいました... 全ては終わったのです。私の中に咲いていた花々は、一気に全て引き抜かれて、散り散りにされ、踏みにじられた状態で私の周りに放置されているのです。

## 20 章

翌日、母は都会へ引っ越すことを明かしました。朝、父は母の寝室に入り、長い間母と二人きりでいました。父が何を母に言ったのかを聞いた者は誰もいなかったのですが、母がこれ以上泣くことはありませんでした。母は落ち着きを取り戻し、食事を要求しました。ですが、母の決断が変わるようには思えませんでした。

私は、一日中散歩をしていたのを覚えています。ですが、庭には近づかず、一度として離れのほうへ視線を向けることもありませんでした。しかし、夕方に私は驚くべき出来事を目撃したのです。父がマレーフスキイ伯爵の腕をとって広間から玄関へと連れ出すと、召使いのいる前で、冷たくマ

レーフスキイにこう言ったのです。「数日前に、貴方様はあるお宅で、出て行くようにとドアを指し示されたとか。今、貴方とあれこれ話し合いをする気はありません。ですが、失礼ながら、もし貴方がまたわが家にお見えになるようなことがあれば、窓から放り出しますよ。私は、貴方の筆跡が気に食わなくてね。」伯爵は頭を下げ、歯を食いしばると、小さく身を丸めて消え去りました。

我々の家があったアルバート通りのある町への引越の準備が始まりました。たぶん、父はこれ以上ダーチャに留まりたいとはもう思っていなかったでしょう。どうやら、父は母に厄介ごとを起こさぬよううまく説き伏せたようでした。全ての段取りが静かに、急ぐことなく行われ、母は公爵夫人に自分の体調が悪く出発までお目にかかれなことを残念に思っていると伝えるよう言いつけることさえしたのです。私は茫然としてぶらつき、ただ一つ、あらゆるものが早く終わってくれればいいのにと願っていました。ある考えが私の脳裏から離れませんでした。なぜあの若いお嬢さんは、しかも公爵令嬢なのに、私の父が既婚者だと知っていながら、また例えばベロヴゾーフとでも結婚できる可能性がありながら、あんな行動に出ようと決心できたのでしょうか。

ジナイーダは何を期待していたのだろうか？自分の未来を破滅させることを恐れなかったのだろうか？そうか、と私は思いました。これこそが恋なんだ、これこそが情熱、これこそが身も心も捧げるといことなんだ...。そして、「自分を犠牲にすることに喜びを感じる人がいる」と、ルーシンが言っていたのを思い出したのです。何気なく離れの窓を見ると、ぽつんとした青白



いものが見えました...「もしかして、あれはジナイダの顔じゃないかな？」と私は思いました...まさに、それはジナイダの顔だったのです。私は我慢できませんでした。最後にジナイダにさよならも言わずに別れることなどできません。良い頃合いを見計らって、私は離れへ出かけたのでした。

客間では公爵夫人がいつも通りの無遠慮でぞんざいな挨拶で私を出迎えました。

「どうしたのですか？あなたのお父様はずいぶんそそくさと出ていこうとしているようですが。」と公爵夫人は鼻の両穴に嗅ぎ煙草をつけたままつぶやきました。

私は公爵夫人を見るとほっとしました。フィリップが口にした「手形」という言葉が私を苦しめていたのです。公爵夫人は何も考えていませんでした...少なくともその時私はそう思っていたのです。ジナイダが隣の部屋から、黒いワンピースを着て、青白い顔で髪をほどいた状態で現れました。ジナイダは黙って私の手を取ると私を連れて行きました。

「貴方の声が聞こえたの。」と、ジナイダは話し始めました。「それですぐに出てきたのよ。それにしても、こうも簡単に私たちを見捨てていくだなんて、悪い子ね。」

「お別れを言いに来たんです、お嬢様。」と、私は答えました。

「恐らく、もうお目にかかることはないでしょう。聞いていらっしゃるかもしれませんが、我々はもう町へ戻ることになったんです。」

ジナイダは、じっと私を見ていました。「ええ、聞いたわ。来てくれてありがとう。もうお目にかかれないうちの。私を悪く思わないでくださいね。時々貴方に辛く当たったこともあったけど、そ

れでもね、私って貴方が思っているような女じゃないの。」

ジナイダは顔をそむけると、窓辺にもたれかかりました。

「そうよ、私はそんな女じゃないの。貴方が私を悪く思っただけなのはわかってるけれど。」

「私がですか？」

「ええ、あなた、あなたがよ。」

「私がですか？」

私は悲しげにその言葉を復唱した後、以前そうだったように強烈で言い表しがたい恍惚状態になって心臓が高鳴り始めました。

「私がですか？ジナイダ・アレクサンドロヴナ、どうか信じてください。あなたが何をしようと、どんなに私を苦しめようと、私は私の人生最後の日まであなたを愛し、神のように崇めます。」

ジナイダはさっと私の方に振り向くと、両手を広げ、私の頭を抱きかかえ、強く、熱烈に私にキスをしました。この長いお別れのキスが誰を追い求めていたのかは誰にも分かりませんでした。私はむさぼるようにその喜びを味わいました。私には分かっていた。再びキスしてもらえないことはもうないことを。

「さようなら、さようなら」私は繰り返しました。

ジナイダは私を振り切って、出て行ってしまいました。私も離れを去りました。離れを去っていくときに抱いた感情を、私は言い表すことができません。できることなら、こんな感情は二度と味わいたくないと願いました。ですが、この感情を一度も経験することがなかったとすれば、私は自分を不幸だと思うでしょう。

私たちは町へと引っ越しました。私は、

そうすぐに過去と決別することができず、勉強に取り掛かることもできませんでした。私の傷は癒えるのに時間がかかったのです。ですが、父その人に対して、私は少しも悪く思うことはありませんでした。むしろ、私の目には父がますます秀でた人物の如く映ったのです... 心理学者たちがこの矛盾した感情を説明なさるなら、お好きになさるがいいでしょう。ある日のこと、私が並木道を歩いていたら、ルーシンとぼったり出会い、私は言い表しようもないほど嬉しくなりました。真っ直ぐで誠実なルーシンの性格が私は大好きでしたし、そのうえ、ルーシンは私に様々な思い出を呼び覚ましてくれる大切な人物なのです。私はルーシンのもとへ飛んでいきました。

「ああ！」と彼は言うと、眉をひそめました。

「あなたではありませんか、お若い方！姿をよく見せてくださいませんか。まだひよっこですが、それでも馬鹿げたものは目に映っていないようですね。室内犬ではなく人間に見えますよ。結構ですな。それで、あなたは何をしていますのですか？勉強していますか？」

私はため息をつきました。嘘をつきたくはなかったのですが、本当のことを話すのは恥ずかしかったのです。

「うむ、まあいいでしょう」とルーシンは続けて言いました。

「びくびくすることはありませんよ。大事なことは、順調な生活を送ること、そして恋愛にどっぷり漬からないことですよ。恋愛が何の役になるのでしょうか？波に身を任せてどこへ行こうと、その先には悪いことしかありませんよ。人間は石の上に立つと言っても、自分の足があってこそですからね。私は咳が出るもので・・・ところでベ

ロヴゾーロフは・・・話を聞きましたか？」

「いったい何でしょう？聞いたことはありません。」

「行方不明になったのです。彼はコーカサスへ行ってしまったそうです。お若い方、あなたにとっての教訓なのです。あらゆる物事のせいで、しかるべき時にそれを手放したり、わなから逃れたりすることができなくなるものなのです。そこから首尾よく抜け出せたのがあなたなのだと、私はそう思います。いいですか、ジナイーダにはもう会わないことです。それでは。」

「もう会わない・・・」と私は考えました。「二度と彼女には会わない」しかし、私はもう一度ジナイーダと会うよう運命づけられていたのです。

## 第 21 章

父は毎日馬に乗って出かけていきました。父の馬は赤みがかかった葦毛の素晴らしいイギリス馬で、長くすらりとした首で長い脚をした、疲れ知らずの悪馬でした。名前はエレクトリクといいました。父以外は誰もエレクトリクを乗りこなせませんでした。ある日のこと、久しぶりに父が上機嫌で私のところへやってきました。父は出かける準備をされていて、もう拍車をつけていました。私は父と一緒に連れて行ってほしいと頼みこみました。

「馬跳びをして遊んでいた方がいいんじゃないか？」と父は私に言いました。「それに、お前の小型馬では私についてこれないだろう？」

「ついていけます。だから、僕も拍車をつけますね。」

「まあ、いいさ。」

私たちは出かけました。私の馬はむく毛の黒馬で、足が強いので、走れば十分に速いのですが、実際エレクトリックがトロットいっぱい走ったときは、私の馬は全速力で走らなければなりませんでしたが、何とか遅れずについて行きました。

私は父のような騎手を見たことがありませんでした。父は、乗られている馬がその様子を感じ、誇りに思っているのではないかと思われるほどに、美しく、気の向くまま器用に乗馬をしていました。私たちは並木道を通り抜け、乙女が原を訪れ、垣根をいくつか跳び越え（初めのうち、私は跳ぶのを恐れていましたが、父は臆病者を軽蔑していましたので、怖がるのを止めました）、モスクワ川を二度渡りました。私は、もう自分たちは家へ帰りつつあるのだと思っていました。父自ら、私の馬が疲れていたことに言及したのでなおさらでした。しかし、突然父は私がいたクリムスキーの浅瀬とは逆の方向に向きを変え、岸に沿って駆けだしたのです。私は父の後を追いかけて始めました。古い丸太が高く積み上げられたところにくると、父はすばやくエレクトリックから跳び下り、私に馬から降りるように言い、エレクトリックの手綱を私に預け、私にこの丸太のそばで待つように言うと、自分は小さな路地で曲がって姿を消しました。

私は2頭の馬を引きながら、歩きつつひっきりなしに頭を振ったり、身体を激しく揺すったり、鼻息を立てていなくエレクトリックを叱りつけながら、川沿いを行ったり来たりしていました。そして、私が立ち止まると、エレクトリックは地面を蹄で交互に引っ掻き回したり、けたたましく鳴きながら私の馬の首に噛み付いたり、要す

るに、甘やかされて育った純血種のような振る舞いを見せるのでした。父はなかなか戻ってきませんでした。川からは不快な湿気が漂ってきたかと思うと、小雨がしとしとと降り始めました。私が長いこと歩き回り、ひどくうんざりしてしまったつまらない灰色の丸太へと、雨はとても小さく点々と黒い雨の跡をつけていきました。私は寂しくなってきましたが、父はまだ戻りません。フィンランド人の警官のような人が、私の方へ近づいてきました。これまた全身灰色で、まるで壺のような、ひどく大きな古びたシャコー帽を被り、警棒を携えていました（それにしても、なぜモスクワ川のあたりに警官がいるのでしょうか！）。警官は、老婆の様なしわしわの顔を私に向けて、こう言いました。

「こんなところで馬など連れて何してるんです、お坊ちゃん。手綱を持っていてあげましようか？」

私は警官の質問に答えずにいました。彼は私に煙草をせがみました。警官を撒くために（それでなくても私は待ちくたびれていたのです）私は父が消えていった方向に数歩歩きました。それから横町を果てまで歩き、曲がり角まで行って立ち止まりました。私から40歩離れた通りに面した木造の小さな家の開け放たれた窓の前で、私に背を向けて父が立っていました。父は窓枠に胸をびたりとつけており、一方家の中では半分まで下がったカーテンに隠れて暗い色のワンピースを着た女性が座り、父と話していました。この女性はジナイーダでした。

私は立ちすくみました。正直に言ってこれは想定外の出来事でした。走り去ることが私のまず最初にとった行動でした。「父が振り返ったら」と私は考えました「僕は

おしまいだ」しかし奇妙な感情のせいで、好奇心よりも、嫉妬よりも、恐怖よりも強い感情のせいで、私はそこにとどまることになりました。

私は目を凝らし、懸命に聞き耳を立てました。父は何かを迫っていたようでした。ジナイーダは、それに受け入れていないようでした。悲しそうでありながら真剣な美しいジナイーダの表情が、今にも目に浮かぶようでした。献身や悲しみ、愛や絶望感のような、言い表しようのない表情。私には、そうとしか言いようがありませんでした。ジナイーダは、短い返答の言葉を口にしながら、視線を上げることなく、大人しく頑なに微笑んでいるばかりでした。この微笑みは、私の知っている昔のジナイーダのものでした。父は微かに肩をすくめると、帽子を被り直しました。この動作は、父がいつもいらいらしたときに見せるサインなのです...すると、フランス語でこんな声が聞こえてきました。「こんな...とはお別れしなければ。」

ジナイーダは姿勢を正し、片腕を伸ばしました...すると突然、私の目に信じがたい出来事が映りました。父がそれを使ってフロックコートの裾から埃を払っていた鞭を突然振り上げた後、肘までまくられたジナイーダの腕に激しい一撃が与えられる音が聞こえたのです。私はどうにか叫ばないようこらえましたが、ジナイーダは身震いし、黙ったまま私の父を見つめ、ゆっくりと自分の腕を唇のところまで上げると真っ赤な傷に口づけをしたのでした。父は脇に鞭を放り投げると、慌てて昇降口の階段を駆け上がり、家に入っていました。ジナイーダは振り返ると両腕を伸ばし、首をのけぞらせて窓から離れました。

驚愕のあまり心臓が止まりそうになりな

がら、とまどいに対する恐怖にも似た感情を心中に抱きつつ、私はもと来た方へ取って返し、路地を駆け抜け、もう少しでエレクトリックの手綱を離してしまいそうになりながらも、川岸へと戻りました。私は何一つ理解できませんでした。冷徹で自制心の強い父が、時折発作的に激昂することがあるのは知っていましたが、それでもやはり私の見たものを理解することはできなかったのです。ですが、すぐに私はこう感じました。これから先どれほど生きようとも、ジナイーダのあの仕草、眼差し、微笑みを忘れることなど、永遠に有り得ないだろうということ。そして、あの見たことのない、突然に自分の前に現れたジナイーダの姿は、永遠に私の記憶に刻み込まれたと感じたのです。私はぼんやりと川を眺めていましたが、自分の目から涙が溢れていたのに気づきませんでした。「ジナイーダが打たれるなんて」と私は思いました。「打たれるなんて...打たれるなんて...」

「おい、どうしたんだ、馬をよこしてくれ！」と後ろから父の声が聞こえてきました。

私は機械的に父に手綱を渡しました。父はエレクトリックに飛び乗りました。凍えていた馬は後ろ足で立ち上がると、1.5サージェン先まで跳躍しました...が、間もなく父は馬をなだめました。父は馬の脇腹に拍車を食い込ませた後、こぶしで首を殴りました。「えい、鞭が無いんだ。」と父はつぶやきました。

私は、つい先ほどの鞭が空を切る音とその一撃を思い出して身震いしました。

「鞭はどうしたのですか？」としばらくして私は父に尋ねました。

父は私の問いに答えず、前へ駆け出しま

した。私は父に追いつきました。私は何としても父の表情を見たかったのです。

「お前は私がいなくて寂しかったのかね？」と父は口ごもりながら言いました。「少しですが。一体どこに鞭を落としてしまったのですか？」と私は父に再び尋ねました。

父はさっと私を一瞥しました。

「落としたんじゃない。」と父はつぶやきました。「捨ててやったんだ。」

父は考え込み、頭を垂れました...そしてこのとき、私は初めて、そして恐らくこれが最後になりましたが、知ったのです。厳しい顔立ちの父でも、これほどの優しさや哀れみに満ちた表情を浮かべることができるのだと。

父が再び馬を飛ばし始めたので、私は追いつくことができず、父よりも 15 分遅れて帰宅しました。

「これこそが恋なんだ。」

夜中に、もうノートや教科書が出され始めた勉強机に向かいながら、私は再び呟きました。「これが情熱なんだ!...たとえ誰からであろうと、どんなに愛しい人からであろうと、ぶたれればカッとなって、我慢などできるはずがないのに!でも、相手を愛していれば我慢できるんだ...なのに僕は...僕は勘違いをしてたんだ...」

このひと月で、私はかなり老けこんだ気がしました。私の恋や、恋に伴うあらゆる不安や苦しみは、私が経験したものとは異なる、未知の何かを前にすると、全くもってちっぽけで、子どもじみたみすぼらしいものに感じました。その未知の何かとは、私がわずかに察することができる程度のものでしたし、まるで薄闇の中で目を凝らそうとも見分けることのできない、見知らぬ、美しくも陰しい顔のように、私には恐

ろしく感じられました。

その夜、私は奇妙で恐ろしい夢を見ました。私は天井が低く暗い部屋へ入っていくところだったと思います。父が鞭を手に持ち、足踏みして立っています。ジナイーダは部屋の隅の方に身を寄せていたのですが、彼女の額ではなく頬に赤い線があったのです。父とジナイーダ 2 人の背後から全身血だらけのベロヴゾーロフが現れ、青白い唇を開き、怒りの表情を浮かべて父を脅しているのです。

2 ヶ月後、私は大学に入学しましたが、父はその半年後に、母と私を伴って引っ越したばかりのペテルブルグで発作のため亡くなりました。死ぬ間際の数日に父はモスクワからの手紙を受け取り、非常に動揺していました。父は母に何かを頼みに行き、泣きまでしたというのです、あの父が、私の父が!父に発作が起こったその日の朝、父はフランス語で私に手紙を書き始めたところだったのです。「わが息子よ」と父は私に向けて書いていました。「女性の愛には用心なさい。その幸せにも、害毒にも用心なさい...」母は父の死後、相当の額のお金をモスクワに送りました。

## 22 章

4 年ほどが経ちました。私は大学を卒業したばかりで、自分が何を始めるのか、これから何が起こるのかまだよく分かっていませんでした。仕事につかないうちはぶらぶらと歩いていました。ある晩、私は劇場でマイダーノフに会いました。マイダーノフはこの間に結婚して、勤めに出ることができていました。が、私が見たところ彼に変わったところはありませんでした。彼は相変わらず大げさに感激をしたかと思うと

突然落ち着いてこう言いました。

「あなたはご存じですか？」とマイダーノフは私に語りかけました。「実は、ドーリスカヤ夫人がここにいるのですよ。」

「ドーリスカヤ夫人とはどなたですか？」

「本当に忘れてしまったのですか？かつてのザセーキナ公爵令嬢、我々が皆夢中になっていた方ですよ。あなたもその例に漏れず。覚えておいでですか、ネスクーシヌイ公園のそばのダーチャでのことですよ。」

「彼女はドーリスキイと結婚したのですか？」

「ええ。」

「そして彼女がここに、この劇場にいるというのですか？」

「いいえ、ペテルブルクにいるのです。彼女は 2, 3 日前にこちらにやってきました。海外へ行く旅支度の途中なのです。」

「彼女の夫はどのような方なのですか？」と私は尋ねました。

「とてもいい奴ですよ、財産もありますしね。モスクワにいたときの私の同僚なんです。あのですね、例の一件以来...このことについて貴方はよくご存知でしょうけど

(と言うと、マイダーノフは意味ありげにやりとしました。) ... ジナイーダさんは結婚相手を見つけるのが容易ではなかったんです。いろいろ後を引くような問題がありましたしね。ですが、あの方の才知を持ってすれば、どんなことでも可能ですよ。会いに行つてごらんください。とても喜ばれると思いますよ。あの方は、前よりもずっとお美しくなられました。」

マイダーノフは、ジナイーダの住所を教えてくださいました。ジナイーダは、デムートホテルに滞在していました。昔の思い出が、胸の中で揺れ動き出しました... 私は明日にでも昔の「想い人」を訪ねようと心に

決めました。ところが、何かと用事ができてしまったのです。1 週間が経ち、もう 1 週間が経ち、そしてようやくデムートホテルに赴いてドーリスカヤ夫人を尋ねたところ、ドーリスカヤ夫人は 4 日前にお産のため急死した、と知らされたのです。

私はまるで何かに突き飛ばされたような心境になりました。私はジナイーダに会えたのに会わなかった、そしてこれから永遠に会うことはできない、という考え、このつらい考えが強烈な自責の念によるありったけの勢いで私の心に突き刺さりました。

「死んでしまった！」と私はもう一度口にする、うつろにドアマンを見やりながら静かに通りへ出て、どこへ行くのか自分でも分からないまま歩き始めました。過去のあらゆる思い出がたちまち私の目の前に現れました。こんな結末を迎えたのが、そしてこんな結末に向かって波乱を呼びながら生き急いだのがジナイーダの若く、情熱的で輝かしい人生だったのだ！私はこんなことを考えつつ、ジナイーダの愛しい顔、目、巻き毛が、地下のじめじめした闇の中で狭い箱の中に納まっているところを思い浮かべていました。そこは、まだこの世にいる私のところから遠くは無く、かつ恐らくは私の父からほんの数歩のごく近い場所なのです。私はずっとこんなことを考えつつ、自分の想像力を余すところなく発揮していたのですが、実のところ、私は訃報を冷淡なやつから聞いた。そして冷淡にその訃報を聞いていたのが私だという言葉が心の中で響いていました。

おお、青春よ！青春よ！お前は何事にも囚われることなく、まるで全世界のあらゆる至宝を占有しているかのようだ。憂いさえもお前には慰めとなり、悲しみさえも似合

ってしまう。自信に満ち、大胆にも、「私は一人で生きているのだ。見ていてごらん。」などと言う。それなのに月日は走り抜け、跡形もなく、数えきれないほど消え去っていき、全ては太陽に照らされた蛹や雪のごとく溶けてしまう...だとすれば、もしやお前のうちにある輝かしさの秘密とは、何でも成しえるというところではなく、何でも成しえると思えるところにあるのか。まさに他に使いようがないほどの、持てる力をもって吹き飛ばしてしまうところにあるのか。私たち一人ひとりが自分のことを浪費家だと本気で思い込んで、

「ああ、時間を無駄にしなければ、どれほどのことを成し遂げられたらだろうか！」などと言う資格があるものと、本気で思い込む心のうちにあるのだろうか。

これがまさに私だったのです...ほんの一瞬生じた私の初恋の幻想に対して、私はため息をついたり憂鬱を感じたりしながら、何を望み、何に期待し、どんな幸福な将来を予想していたのでしょうか。それにしても、私が望んでいた全体像から何が狂ってしまったのでしょうか？私の人生を夕闇が包み込みつつある今、つかの間に過ぎ去ってしまった青春の朝の雷のような記憶よりも新鮮で、大切なものは私に残っているのでしょうか？しかし私は理由もなく自分を傷つけています。そして浅はかで未熟だった当時でも、悲しそうに私に呼びかける声や、墓から私に伝わってきた荘厳な音に私が聞こえないふりをしていたわけではありませんでした。

今でも覚えています、ジナイーダの死を知ってから数日経ったのちに、私自身、どうしてもそうせすにはいられなくなり、同じ建物に住んでいた、ある貧しいお婆さんの臨終に立ち会ったのです。ぼろを纏

い、何枚も敷いた硬い板の上で、袋を枕にしていたお婆さんは、辛く苦しい最期を迎えていました。彼女の一生は、日々の貧窮との辛い闘いのうちに過ぎ去ってしまいました。喜びを見出せず、幸福の蜜の味を知らないお婆さんにとって、死や、死によってもたらされる自由や平穏は、喜ばしいものなのではないかとさえ私には思えたのです。ですが、老いた身体がまだ持ちこたえているうちは、氷のように冷たくなっていく手の置かれた胸が、未だ苦しそうな呼吸で膨らんでいるうちは、そして最期の力が消え失せずにいるうちは、お婆さんは終始十字を切り、「神様、私の罪をお許してください」と囁き続けていましたが、意識の最期の火花とともに、お婆さんの目から、死ぬことへの恐れや怯えの色がようやく消えたのです。この時、このあわれなお婆さんの臨終の床で、ジナイーダのことを思って恐ろしくなったのを今でも覚えています。そして、ジナイーダのためにも、父のためにも、そして自分のためにも、私は祈りを捧げたくなったのです。